北条泰時の和歌を読む

中川博夫

はじめに

鎌倉期の関東歌壇は、鎌倉殿・征夷大将軍によって画期される。「一　源氏将軍時代、二　藤原将軍時代、三　宗尊親王時代、四　惟康親王以後」というのが、石田吉貞の唱えた画期である。一は、新古今歌人源頼朝と、その新古今歌壇を憧憬した実朝によって強く認識されるし、三は、前後代に比してより本格的な歌壇が形成され、宗尊自身は時代を代表する歌人として位置付けられる。

北条泰時についてはもちろん、歴史学で、早くから詳しく論究されてきた。ここでは、簡略に閲歴を記すに留める。

泰時は、寿永二年（一一八三）生まれ、父は義時、母は「阿波局」（鎌倉年代記、系図纂要等）とも伝えるが未詳である。仁治三年（一二四二）五月九日出家、法名観阿。六月十五日に、六十歳で没した。承久元年（一二一九）叙爵して駿河守任官後、武蔵守、讃岐守、左京権大夫を歴任し、正四位下に至る。幕府では、侍所別当、六波羅探題北方、執権（第三代。初代とも）を務めた。『御成敗式目』を制定し、幕府と執権政治を確立して軌道に乗せたと評される。

記録類や説話集は、道理を重んじる賢人であるとし、古代中国の聖人君子になぞらえて高評する。一方で、高熱に

苦しんだ最期が平清盛にも重ねられ、京都朝廷に対する厳正な対処からか、悪評する向きもある。

なお、泰時の和歌に関わる事跡として、衲叟馴窓の家集『雲玉集』（夏・一六三）に、次のように見る。

冷泉家の母阿仏と申す人、先代の始め、平泰時、歌よむべき故実尋ねられし一帖の中に、源氏の歌とて、「袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬ大和撫子」、此の歌褒美せられしかば、それがしの主も知らぬ歌のたぐひ見出しし風情かはりめなくや。

「先代」は、為家のことであろう。「袖濡るる」の歌は、『源氏物語』「紅葉の賀」の藤壺中宮の歌（八九）である。全体の意図が分かりにくいが、歌の家の人に教えを請う程に、泰時が和歌に熱意を持っていたことを伝えているのであろう。また、別（雑・五二四）に次のようにも見える。

為世卿は、為氏の嫡子にて、二条家を興し、続千載撰ぜられし人の歌に、「人はまだ渡らぬ松の梢をも風こそ渡れ天の橋立」、橋立によそへたるは、さる事なれど、もとより人の松の梢を渡るものかとて、せめてさるはまだ渡らぬとよまれざりしと、京童も申せしとかや。されども撰者になり給ひぬ。為相は上手にて文書も残らず相伝正しけれど、果報薄きにや。平泰時を頼み、鎌倉藤谷殿と申しき。京におはさざれば撰者になり給はず。経信、並び無き作者にて、時代不同御歌合に人丸に番はれし。一流をも立てし人なれど撰者にあらず。光俊、さしての作者ならねど後拾遺（ママ）撰ぜられしとなり。

これは、泰時が為相を庇護したことを伝えるものであろうが、言うまでもなく、為相は泰時没後の生誕であり、時代が合わない。しかしながら、先の記事と併せれば、泰時が為家と阿仏尼との子為相の冷泉家と関わりを持つ人物として伝承されていた、と推測されるのである。それは泰時が執権としてばかりでなく、歌人としても重要な存在だと認識されていたことを示唆するように思われるのである。

一　泰時の現存歌を読む―勅撰集

以下に、泰時の現存歌を取り上げて、注解を加えながら読んでいきたい。本稿末尾に「北条泰時詠各集歌番号（重出状況）一覧・底本一覧」を付してある。引用の本文は、特記しない限り、新編国歌大観、新編私家集大成CD－ROM版、日本古典文学大系・新日本古典文学大系・新日本古典文学全集等の流布本に拠る。表記は私に改める。原則として歌集名の「和歌」は省略する。また、以下の諸注を参照したが、本論中に個別に記した場合もある。和歌文学大系（明治書院）続後撰和歌集　続古今和歌集　続拾遺和歌集

泰時の歌は勅撰集には、次のとおり、計21首の入集である。（生前）新勅撰3、（没後）続後撰3、続古今5、続拾遺3、新後撰1、玉葉1、続千載1、続後拾遺1、新千載2、新拾遺1。

北条氏得宗、鎌倉幕府執権であれば、『新勅撰集』以下の京都の勅撰集に重く扱われてしかるべきだろう。しかし、意外に入集数が少ないのは、詠作数そのものが多くなかったのかもしれないこと、鎌倉時代後期に幕府が衰勢に向かったことが関わっているのであろう。この様相は、泰時の和歌が純粋に歌の良し悪しによって勅撰集に取られたのではないだろうことを疑わせる。当代一の権力者北条義時の嫡嗣にして、自らも幕府の六波羅探題や執権に任じていたことが、和歌の入集数に反映していると見てよい。それは、北条氏中で最も大きな歌人としての存在感を示す、泰時の弟政村も同様である。しかしまた、『続後撰集』以下は、泰時没後の撰修であるので、そこに政治的な忖度が残存しているにせよ、泰時の人物象の反映や歌人としての評価が幾分かは与っていると見るべきであろう。

泰時の入集歌を勅撰集の順に読んでいく。

①新勅撰集　後堀河天皇下命。藤原定家撰。貞永元年（一二三二）十月二日奏覧。文暦二年（一二三五）三月十二日

完成。位置（以下同じ）「平泰時」。穂久邇文庫蔵定家識語本（影印版による）。

1　ちはやぶる神世の月のさえぬれば御手洗川もにごらざりけり（新勅撰集・神祇・五六九）

訳（ちはやぶる）神代から変わらぬ月が冴え渡っているので、この富士宮の御手洗川も、澄んで濁らないのであったな。

詞書は「駿河の国に神拝し侍りけるに、富士の宮によみてたてまつりける」。

泰時は、建保七元年（一二一九）正月五日に従五位上に昇叙し、二十二日に駿河守に任じ、同年（四月十二日に承久改元）十一月十三日の任武蔵守まで、その任にあった。この間の任国の諸社巡拝の折の詠作であろう。泰時は、三月二十六日に駿河国に下着した。それは、「富士浅間宮」以下の諸社に神拝の為であり、正月二十二日に任国守も、国郡に「忩劇」（騒動）が連続していたので、今に延引したのだという（吾妻鏡・建保七年三月二十六日条）。もちろん、正月二十七の実朝暗殺の混乱が、延引の真因であろう。「富士浅間宮」は、駿河国一宮で現在は「富士山本宮浅間大社」（静岡県富士宮市宮町）と呼ぶ神社であろう。

一首は、枕詞「ちはやぶる」から「神世の月」に繋げる。「神世（代）の月」の詞は、良経の「天の戸をおしあけがたの雲間より神代の月の影ぞ残れる」（新古今集・雑上・一五四七。春日社歌合元久元年・暁月・三二。秋篠月清集・一五九一。自讃歌・二二。定家十体・長高様・六一）に拠ったのであろう。この良経歌は、当時から高く評価されていたと思しいが、「神代」と「月」を詠む淵源は、『万葉集』の「ひさかたの天照る月は神代にか出で反るらむ年は経につつ」（巻七・雑歌・一〇八〇・作者未詳）に求められるし、院政期から鎌倉期初頭にかけては、次に記すよ

うな歌の小さな集積がある。「神代にはなほたちまさる光かとおどろくばかりすみの江の月」（田多民治集・月三十五首・二〇八）、「思ひ出でよ神代も見きや天の原空もひとつにすみの江の月」（長秋詠藻・左大将〔実定〕十首の題中、江上月・二四七）、「神代よりたぐひなしとも住吉の松や今宵の月を見るらむ」（住吉社歌合嘉応二年・社頭月・四八・寂超）、「神代にも今宵ばかりの月やありし昔を見たる宇治の橋姫」（御室五十首・秋・三二四・季経）。「神代の月」の詞は、これらを経て、尚古に傾く良経によって詠出されたのであろう。それは措いて、泰時は、鎌倉殿実朝以下の関東歌人と同様に、『新古今集』をよく見ていたであろうから、良経の歌に学んだとして不思議はない。

「御手洗川」がどのような流れを指して言ったのかは分からないが、富士宮は清水の地であるから、「にごらざりけり」は実感でもあったろう。しかしまた、泰時が、俊成の「月さゆる御手洗川に影見えて氷にすれる山藍の袖」（新古今集・神祇・一八八九。文治六年女御入内和歌・臨時祭・二五六。長秋詠藻・六四四）を意識していた可能性は見てもよいのではないだろうか。

いずれにせよ一首は、駿河国の一宮の神代以来の由緒を誉め、同国の安寧の永続を言祝ぐ意図を込めた詠作であろう。

2　世の中に麻は跡なくなりにけり心のままの蓬のみして（新勅撰集・雑二・題しらず・一一五二。古今著聞集・神祇第一・北条義時は武内宿禰の後身たる事・七）

訳　世の中には真っ直ぐに生える麻のような廉直は、跡形もなくなってしまった。ただ、心のままに乱れ曲がる蓬のような奸邪ばかりとなって。

「麻」は正直、「蓬」は邪曲を象徴する。「蓬生二麻中一、不レ扶而直」（荀子・勧学篇）を典故とする「麻の中の蓬」

の故事、『十訓抄』には「麻の中の蓬はためざるにおのづから直し」（五ノ序）などと見える故事、を踏まえる。歌の表現としては、『新古今集』の「庭の面に茂る蓬にことよせて心のままに置ける露かな」（秋下・閑庭露しげしといふことを・四六七・基俊。基俊集・三六。中古六歌仙・一三五）に拠っていよう。この故事に寄せた詠作は、新古今歌人慈円の「人の来てみちびく野辺に出でぬれば麻の中なる蓬をぞ見る」（新編国歌大観拾玉集・詠百首和歌法門妙経八巻之中取百句・善知識者・二五四〇）や家隆の「しかりとて直き心もよに立たず混じる蓬のあさましの身や」（玉吟集・述懐歌あまたよみ侍しとき・二七二九）がある。

定家は、承久の乱の後十年程を経た、独撰の『新勅撰集』に、当代の治世安楽を知らしめる和歌を集めんとした（同集序）。政教性を表立てた勅撰集である。「身の懐ひを述ぶる」と規定した雑部には、もちろん述懐歌が多く収められている。この泰時の歌は、雑歌二の治世に関わる述懐の小歌群（一一五二～七）の、最初に配されているのである。最後は、下命者後堀河天皇の御製「繰り返しししづのをだまき幾たびも遠き昔を恋ひぬ日ぞなき」（男ども述懐歌つかうまつりけるついでに・一一五七）である。その措置に、定家の泰時とその歌に対する評価を見てよいであろう。

『古今著聞集』は、八幡神が世の中の乱れが時政の子（義時）の時に治まると託宣したと記し、義時は武内宿禰の後身だと言い、「その子泰時までも、只人にはあらざりけり」としてこの歌を引き、「思ひあはせられてはづかしくこそ侍れ」と結んでいる。

後に、阿仏尼は「…みだりがはしき　末の世に　麻は跡なく　なりぬとか　諫め置きしを　忘れずは　ゆがめる事を　また誰か　引き直すべき　とばかりに　身をかへりみず　頼むぞよ…」（十六夜日記・長歌・一一七）と詠じた。これは、細川庄の相続をめぐる係争で鎌倉に下り幕府に訴えた阿仏尼が、かつての執権泰時の歌を引き合いに出し

て、その諫めどおりに廉直公正な判決をするよう求めて詠じた長歌である。定家撰の『新勅撰集』に通じていたはずの阿仏尼が鎌倉でこのように詠じることに不思議はないが、同時に泰時の存在感の大きさを窺うことができる。

道歌に通じる歌境の一首である。室町時代に『北条重時の家訓』が流布し、それに「準拠」して作られた「教訓書」を「基にしてみだりに述作し、名を西明寺殿に仮りたものであろうか」（古典文庫『中世近世道歌集』池田廣司解題）という尊経閣文庫蔵『西明寺殿教訓書』に付載の「西明寺殿御歌」（67首）に、「よき事にむつびてわろき事あらじ麻の中なる蓬見るにも」（三〇）の一首がある。この泰時の歌と同じく、「蓬生二麻中一不レ扶而直」に基づく歌である。誰の作かは分からない。直接の関係性は不明だが、五代執権北条時頼が祖父で三代執権の泰時の歌に連なる類歌を詠んだとしても不思議はない、と大方に納得させる類似とは言える。ちなみにこの一首は、室町末写（前掲解題）という東洋文庫蔵『教訓和歌西明寺百首』（二六、二三句「むすびてわろき事はなし」五句「ゑもぎみるにも」）、明暦三年刊『若衆物語』付載「西明寺殿百首」（四七、二三句同上）に継承される。

3　山の端に隠れし人は見えもせで入りにし月はめぐり来にけり（新勅撰集・雑三・一二六〇）

訳　東の山の端に隠れたあの人、父は現れもしないで、（それなのに）西の山の端に入った月は、また東の山の端に廻って来たのであった。

詞書は「父身まかりて後、月明かく侍りける夜、蓮生法師が許につかはしける」。

父は、鎌倉幕府第二代執権北条義時のこと。元仁元年（一二二四）六月十三日に六十二歳で没した。義時は故頼朝の法華堂の「東山上」を「墳墓」としたという（吾妻鏡）。それを踏まえた泰時の作意は、西に入った月は再び東の

山に巡り来て昇ったのにその東の山に隠れた義時の姿は見えない、と嘆じたのであろう。ただし、その事情を知らなかったとすれば、撰者定家は、西方浄土の通念から、「山」を西の山と解していたかもしれない。

泰時がこの歌を使わした蓮生・宇都宮頼綱は、元久二年（一二〇五）の牧氏の変で、出家献髻して義時から助命され、京都西山嵯峨野に隠棲した。蓮生は義時に、一定の恩義を感じていたと見てよいであろう。泰時はその事情を認識していたのであろう。一方、定家男為家は、蓮生・頼綱の女婿である。『新勅撰集』を道家に撰進した文暦二年（一二三五）三月十二日の二ヶ月後、五月二十七日に定家は嵯峨中院障子の色紙形を染筆して蓮生に送っている。この色紙形が従来は『百人一首』に関わるとされてきたが、現在では『百人秀歌』に関わると見るのが妥当だとされつつある。いずれにせよ、『新勅撰集』撰修時に、定家が蓮生の泰時との繋がりを知っていて、この歌を採録したと考えるのが穏当ではないだろうか。

一首は、「あかなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」（古今集・雑上・八八四・業平。伊勢物語・八十二段・一四九・馬頭）を意識していよう。本歌と見ても誤りとは言えないかもしれない。院政期本歌取りの手法で、「山の端逃げていれずもあらなむ」の心と詞を取って、「山の端に隠れ」た亡父を悔やみ悼もうとしたと解することができよう。しかし、定家撰の『新勅撰集』歌として、古歌の詞を取り心を新しくする定家本歌取り説に即して、本歌とは見ないでおく。

先例を見ない「隠れし人」は、率直な直截的表現で、泰時らしい用詞と言える。後に為家は、それを「同じくはなほ照りまされ秋の月隠れし人の影や身ゆると」（秋思歌・一二）と用いた。この「秋思歌」は、弘長二年（一二六二）七月十三日に嬰児を残して三十一歳で没した、為家の愛娘為子（後嵯峨院大納言典侍）の服喪中の痛切極まりない哀傷歌集である。為家は、泰時のこの歌に拠ったのであろう。

また、宇都宮歌壇の「昔見し人はいづくに隠るらむひとりくまなき山の端の月」（新和歌集・雑上・宇都宮神宮寺二十首歌に・七二七・謙基法師姉）は、同工異曲と言えるが、あるいは泰時の歌に倣ったのではないだろうか。

②続後撰集　後嵯峨院下命。藤原為家撰。建長三年（一二五一）十二月二十五日（一説十月二十七日）奏覧。「平泰時朝臣」。冷泉家時雨亭文庫蔵為家自筆本（影印版による）。

4　明(あ)けぬとも天(あま)の川(かは)霧立(た)ち込(こ)めてなほ夜を残(のこ)せ星合(ほしあひ)の空(そら)（続後撰集・雑上・七夕の朝・一〇五九。題林愚抄・秋一・七夕朝・続後撰・三一七六・平泰〔　〕朝臣）

訳　夜が明けてしまうとしても、天の川は霧が立ち込めて、なおそのまま夜を残してやれ、七夕の両星が逢う星合の空なのだから。

「明けぬとも」「なほ」の構文と第三句に「て」を置く詠み方は、俊頼の「明けぬともなほ秋風はおとづれて野辺のけしきよおもがはりすな」（千載集・秋下・三八四。雲居寺結縁経後宴歌合・九月尽・三〇。散木奇歌集・秋・五六八。中古六歌仙・四五。無名抄・一二）からの影響があるか。

「天の川霧」は、天空の天の川に立つ霧。「天の川」と「川霧」の合わさった詞。勅撰集の初出は『後撰集』（秋中・八月十五夜・三三六・清正）だが、七夕に寄せた歌としては、『詞花集』の「今日よりは天の川霧立ち別れいかなる空に逢はむとすらん」（雑下・天暦の帝隠れさせおはしまして、七月七日御忌果てて散り散りにまかり出でけるに、女房の中に贈り侍りける・三九九・元輔）が先規となる。「一年に一夜のみ逢ふ七夕を立ちな隠しそ天の川霧」（清正集・七月七日七夕の心・二六）や「七夕の待つ夜は今宵ひさかたの天の川霧立ちな隔てそ」（万代集・秋上・

八〇二・良実）などと、「川霧」は、七夕の逢瀬を妨げるものとして詠まれることもあったが、泰時の歌の場合はむしろ、七夕の別れを猶予させるべきものとして詠まれている。その点では、「ひさかたの天の河原の渡し守君渡りなば楫隠してよ」（古今集・秋上・一七四・読人不知）を本歌にした、家隆の「七夕の別れの舟の楫隠せ帰るあしたの天の川霧」（玉吟集・百首和歌・夏・七夕別・一〇三〇）に類する。そうだとしても、七夕の朝の別れを少しでも遅らせるように、「天の川霧」が「立ち込めて」辺りを暗く隠して「夜を残せ」と言う趣向は、新鮮であろう。そこに泰時の、七夕に同情する人柄までを見るとすれば、少しく単純な近代的読みに過ぎるだろうが、先例を見ない「なほ夜を残せ」の直截的な詞の選択に、歌人泰時の率直な表現を好む姿勢を認めることは許されるであろう。

なお、為家の「時鳥鳴く一声も明けやらずなほ夜を残す老いの寝覚めに」（為家集・夏・寝覚郭公正嘉二年・一三三九）は、撰者として泰時のこの歌に触れたことが反映しているのかもしれない。

5　都にて今もかはらぬ月影に昔の秋をうつしてぞ見る（続後撰集・雑上・一〇七四）

訳　都で今も変わることのない月の光にひたすら（心を）振り向けて、あの昔の秋を、今に移すようにして、映し見ることだ。

詞書は「久しく年経て、都に帰り上りて侍りける九月十三夜、月隈なかりけるに、昔もの申しける人の許につかはしける」。

三十九歳の泰時は、承久三年（一二二一）五月の承久の乱に当たり西上し、六月十五日に入洛する。そのまま、新設の六波羅探題（北方）として、叔父時房（南方）と共に駐留する。貞応三年（一二二四）六月十三日の父義時急逝

を十六日に知って翌日出京し、同二十六日に鎌倉に下着した。その後執権として政務に執掌し、武蔵守に左京権大夫を兼ねていた五十六歳の嘉禎四年（一二三八）に、将軍頼経の上洛に随行する。一行は、正月二十八日に鎌倉を発ち、二月十七日に入洛して六波羅の新造御所に着いた。諸行事をこなしつつ八ヶ月程滞在して、十月十三日に京都を出て、二十九日に鎌倉の御所に着いた。この間泰時は、七月十一日に園城寺に参詣し、十三年前のこの日が忌日の政子に報ずるために、鎌倉で写経させて毎巻奥に泰時が署判した一切経五千余巻を納めるなどした。

この歌は、その二ヶ月後の九月十三日の明月の晴夜に、過年に（六波羅探題として）在京の時に対面した人がり、今に懇情が深いので（「御懇志于レ今不二等閑一」）、月に興ずるのを機縁として、その人に贈った歌という（以上吾妻鏡）。明治書院和歌文学大系佐藤恒雄『続後撰和歌集』（平二一九・一）は、この「もの申しける人」につき、「親しく語らいあったことのある異性。久しく逢えなかった都の妻室の一人か。」と注するが、それは当たらないのではないか。少なくともこの歌を雑部に入れた撰者為家は、そのようには見ていなかったであろう。「人」は、あるいは女性かもしれないが、男性である可能性も低くなく、「妻室」とのみ見る必要は全くない。

一首は、「都にて見しにかはらぬ月影を慰めにても明かす頃かな」（拾遺集・恋三・京に思ふ人をおきて遙かなる所にまかりける道に、月の明かかりける夜・七九〇・読人不知）を本歌にすると見てよい。

それにしても、「月影に昔の秋をうつしてぞ見る」が分かりにくい。「隈もなき鏡と見ゆる月影に心うつらぬ人はあらじな」（金葉集・秋・顕季卿家にて九月十三夜人人月の歌よみけるに・二〇五・長実）や「雲の波かからぬさ夜の月影を清滝川にうつしてぞ見る」（金葉集・秋・水上月をよめる・一八七・前斎宮六条）を踏まえれば、「うつして」は、一方に振り向けての意味の「移して」に、姿や影を映し見るの意味の「映して」が掛かると解される。同時に、「今」「昔」の縁で時を「移して」の意味が重なると解したい。

木船重昭『続後撰和歌集』（平元・一、大学堂書店）は、一首の通釈を「久しぶりに帰って来た都で、今も変わらない美しく澄みわたる月に、昔の秋を映して見て、あなたと親しみ語らった当時を偲んで、なつかしく思いますよ。」とする。前掲佐藤『続後撰和歌集』は、二・三句と下句を、「今も変わらぬ澄んだ月の光に。」「あなたと親しく語らいあった昔の秋を映し懐かしく偲び見たことでした。」としている。いずれも「うつして」を「映して見て」「映し」「見た」とのみ解しているが、それでは不十分である。泰時の表現のわかりにくさの反面の重層性は、指摘されなければならない。

6　かき置きし和歌の浦路の藻塩草いかなるかたに浪の寄すらん（続後撰集・雑中・一一五〇。歌枕名寄・南海・紀伊国・玉津島・続後十七・八三三〇）

訳　掻き置いた和歌の浦の海岸の道の藻塩草は、どのような潟で波が寄せるているのだろうか。それならず、私が書き置いた和歌の道の詠草は、いったいどのような方面で（その詠草を求める）恩情の波が寄せているのだろうか。

詞書は「蓮生法師許より、よみ置きたる歌尋ぬる事侍りける時、つかはすとて」。

一首は、俊成の「契り置きし契りの上に添へ置かむ和歌の浦路の海人の藻塩木」（御裳濯河歌合・七四。新勅撰集・雑二・西行法師自歌を歌合に番ひ侍りて、判の詞あつらへ侍りけるに、書き添へてつかはしける・一一九七）に倣っていようか。そうだとすると、後述するように、この歌は『新勅撰集』成立以前の詠作であるから、この歌を『御裳濯河歌合』その他で知ったことになるので、泰時の和歌学習の範囲の広範さを窺うことになる。

「かき置きし」は、「掻き置きし」と「書き置きし」の掛詞で、「和歌の浦路」は、紀伊国の歌枕「和歌の浦」の

「路」（和歌の浦の海岸沿いの道）の意味に、和歌の世界・詠作の道の意味が掛かり、「藻塩草」は、製塩の藻塩草の意味に、和歌の詠草の意味が掛かる。また、「かた」は、「潟」と「方」の掛詞、「浪」は、海の波の意味に、恩情の波の意味が掛かるか（寓意）。以上の、それぞれの詞は縁語関係にある。

「いかなるかた浪の寄すらん」が、どういう寓意なのかがよく分からない。詞書によれば、蓮生宇都宮頼綱から、泰時が日頃詠み置いている歌をさがし求めてきた、という。これは、撰集に際して、執権泰時の詠作を収載すべく、その詠草の提出を求めてきたということに他ならない。蓮生は、元久二年（一二〇五）の牧氏の変で、出家献髷して助命され、京都西山嵯峨野に隠棲した。時の権力者義時には、一定の恩義を感じていたと見てよいであろう。泰時が、義時の追悼歌を蓮生に送っているのも（→3）、そのことと無縁ではあるまい。その蓮生が、時の撰集の撰進に協力して、義時後嗣の執権泰時に働きかけたものと推測される。和歌文学大系『続後撰集』（佐藤恒雄）は、「蓮生は女婿為家の撰歌を後援すべく自ら斡旋を買って出たのであるまいか。」と言う。もしその「撰歌」が『続後撰集』のそれを言うのなら、それはあり得ない。泰時は、宝治二年（一二四八）七月二十五日の後嵯峨天皇による為家への撰集（続後撰集）下命以前の、仁治三年（一二四二）六月十五日に六十歳で没しているのである。これが、勅撰集であるのならば、それは『新勅撰集』でなければならない。後堀河天皇による定家への撰集（新勅撰集）下命は、貞永元年（一二三二）六月十三日である。時に泰時は、既に八年前に家督を嗣ぎ執権となり、正五位下（同年四月）武蔵守であった。『新勅撰集』の企画段階から積極的に主導した九条家の道家でさえ、三男の頼経を将軍として関東に送っている事情もあってか、寛喜二年（一二二六）六月十八日の泰時嫡嗣時氏の死去には、道家女中宮竴子の和歌会（同集賀歌巻頭は道家と教実父子のこの折の歌）催行の時期に配慮せざるを得なかった（実現は二年後）。そういった背景で道家が要請して撰者となった定家やそれに助力した為家あたりから、幕府の権力者たる泰時の歌を求めるよう、

蓮生に仲介を依頼したと推測することは許されるのではないだろうか。現に、曲折を経た撰集の最終段階である文暦二年（一二三五。九月十九日嘉禎改元）正月一日には、勅撰（新勅撰集）作者たるを感悦する泰時の仮名状を、為家が定家に送っているのである（明月記。現存本「勅権佐者」とあるのは「勅撰作者」の誤りであろう）。定家はもしかすると、政治的配慮ばかりではなく、泰時の人物や和歌を評価していたのかもしれない。泰時は、勅撰集に自詠が撰入されることに繋がる蓮生からの働きかけであることを察知していたであろうから、「いかなる方に浪の寄すらん」は、素知らぬ風を装いながら、定家が（為家や）蓮生を通じて自分の歌を求めていることへの感謝の混じった驚きを詠嘆した表現ではないだろうか。ここに言う「浪（波）」は、『古今集』仮名序に「遍き御うつくしみ（慈しみ）の浪、八洲の外まで流れ」とあるのが相当するようにも思われるが、「慈しみ」のような形容がないので、やはり曖昧である。「浪の寄すらん」の作例には、「動きなき巌に根ざす海松の千歳を誰に波の寄すらん」（続古今集・賀・石に海松の生ひたるを見て・一八九九）がある。この「誰に波の寄すらん」は、千歳の松の樹齢の恩恵を誰に及ばせようとするのか、という意味合いであろうから、泰時の歌のそれはこれに遠くないように思われる。

③続古今集　後嵯峨院下命。藤原基家・（同家良。途中死去）・同為家・同行家・真観（藤原光俊）。文永二年（一二六五）十二月二十六日奏覧、同三年（一二六六）三月十二日竟宴。位置は「平泰時朝臣」。尊経閣文庫蔵本（伝二条為氏筆本）。

7　降る雪の晴れ行くあとの波の上に消え残れるや海人の釣舟（続古今集・冬・題不知・六五二、底本の「のこれるや」の「や」は「へ」に上書。雲葉集・冬・だいしらず・八六四。宗尊親王百五十番歌合・百九番判詞、下句

「残れる雪や海人の釣り舟」。六華集・冬・続古・一一二六一、四句「消え残りたる」。）

訳　降る雪が晴れて行く後の波の上に、その痕跡として消え残っているのか、海人の釣り舟は。

「あと」は、のちの意味の「後」に、形跡・痕跡の意味の「跡」が掛かると解する。「晴れ行くあと」の詞は、隆信の「横雲の晴れ行くあとの曙に嶺飛び渡る初雁の声」（正治初度百首・秋・一二四九）が早い。後鳥羽院の「日に磨く玉かとぞ見る夕立の晴れ行くあとの野辺の白露」（後鳥羽院御集・建仁元年三月内宮御百首・夏・一二三一）が続く。泰時がこれら新古今歌人の作に学んだ可能性は見ておきたい。勅撰集では、この泰時の歌が初出である。気象の変化の叙景の詞で、京極派好みであり、事実、これ以外では、『玉葉集』の二首（三三九・平熙時、二〇一七・法印仲覚）と『風雅集』の二首（五七四・実名、一五一八・読人不知）が、勅撰集の用例である。中で、北条政村孫・同為時男で十二代執権熙時の「時鳥雲のいづくぞ村雨の晴れ行くあとの夜はの一声」（玉葉集・夏・三三九）には、大伯父泰時の歌からの影響を認めてよいであろう。新古今歌人が詠出し、関東歌人を経由して、京極派勅撰集に顕現する事例と見ることができる。

ちなみに、『宗尊親王百五十番歌合弘長元年』（冬・百九番・右・二一八）の惟宗忠景の「かき暗し降れどたまらぬ波の上に浮かべる雪や海人の釣舟」について、藤原基家の判詞に、次のとおり見える。「右、降る雪の晴れ行くあとの波の上に残れる雪や海人の釣舟、とよめる歌に相似るにや。此の歌は雲葉の冬部にしるし入れて侍り。然れば左勝つべくや。」。基家はまず『雲葉集』にこの歌を採録し、歌合判詞で思い起こし、さらに撰者に加わった『続古今集』にも改めて撰入したのであろう。基家がこの歌を評価していたことは疑いないが、歌合で相似を咎めたのは、関東の歌合なので、忠景が泰時の歌を真似たことを疑ったからではないだろうか。

「波の上」の「海人の釣舟」を詠むことは古く、「武庫の海の庭よくあらしいさりする海人の釣舟波の上ゆ見ゆ」

(万葉集・巻十五・三六〇九・作者未詳。五代集歌枕・むこのうみ・八八五、結句「波の上に見ゆ」)に始まるが、勅撰集に見えるのはこの泰時の歌だけである。一首全体の景趣としては、「浪の上にむらむら雪ぞ積もりけるそれとは見えず海人の釣舟」(冬題歌合建保五年・冬海雪・七三・忠定)の後時を叙したと言える。泰時が、忠定の歌を見知っていたかは分からない。

8　近(ちか)づけば野路(のち)の笹原(ささはら)現(あらは)れてまだ末霞(すゑかす)む二村(ふたむら)の山(やま)(続古今集・羇旅・旅の道(みち)にてよめる・八六五。雲葉集・羇旅・旅の道にて・九七二。歌枕名寄・東海三・参河国・二村山・同〔続古〕十・四九五三。六華集・羇旅・一五四九、二句「野路のしの原」)

訳　近づいてみると野の道の笹原が姿を現して、しかしいまだ先の方は霞む、二村の山よ。

詞書の「旅の道にて」は、承久三年(一二二一)五月に承久の乱で西上・貞応三年(一二二四)六月に父義時の死で東下の折か、または、嘉禎四年(一二三八)三月〜十月の将軍頼経上洛・帰東随行の折か、いずれかであろう(↓5)。後者の可能性が高いか。

「笹原」は「篠原」とも書く。その「野路の笹原」は、近江国の歌枕のそれではなく、一般の野の道の笹原(篠原)のことであろう。歌枕「二村の山」は、『能因歌枕』は尾張国とし、『八雲御抄』や『歌枕名寄』等は三河国とする。ここは、いわゆる鎌倉街道沿いの尾張国の「二村山」(現愛知県豊明市)であろう。「境川」を越えると三河なので、「三河国」の所在との認識も生まれたのかもしれない。『更級日記』には、「それよりかみは、猪の鼻といふ坂のえも言はず侘びしきを上りぬれば、三河の国の高師の浜といふ。八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見所もなし。二村の山の中に泊まりたる夜…宮路の山といふ所越ゆるほど」と見える。つまり、高師の浜(遠江・三河国境。

愛知県豊橋市）―八橋（三河国。愛知県知立市）―二村山という道筋を取ったらしいが、ここも、「二村の山」を三河国と認識していたであろう。ちなみに、『八雲御抄』は、「宮路山」を尾張国と誤認していて、「二村山」を三河国と誤認するのと対称である。

「まだ末霞む」は、「旅衣袖に先立つ春風になほ末霞む武蔵野の原」（白河殿七百首・春・野霞・七・実名）の「なほ末霞む」に近い意味合いであろうか。

幕府御家人宇都宮景綱の「旅の空雲間に山は現れて雨晴れ初むる野路の遠方」（沙弥蓮愉集・雑・五五三）の「現れて」「野路（の遠方）」の用詞は、この泰時の歌に学んだことが反映しているかと疑われる。また、鎌倉幕府末期の政所執事二階堂行朝の「越え行けば一かたならず霞むなり二村山の春の曙」（新千載集・羇旅・都に上り侍りける時二村山を越ゆとてよめる・八〇八）の第二～四句は、泰時の歌の下句を敷衍したようにも見える。なおまた、「木の本に近づくほどの花ぞ見るまだ行く末の山は霞みて」（為理集・三月三日、民部卿家・山路花・四〇）は、この泰時の歌の影響下にあると見てよいのでないだろうか。

9　山川の氷や薄く結ぶらん下に木の葉ぞ見えて流るる（続古今集・雑上・だいしらず・一六一二。題林愚抄・冬中・薄氷・続古十七・五二九二）

訳　山の中の川の氷は、薄く張っているのだろうか。下に木の葉が見えて流れている。

「山川」は「やまがは」で、山の中を流れる川のこと。

一首は、「氷りして音はせねども山川の下は流るるものと知らずや」（詞花集・恋上・二二七・範永）を本歌にする。この歌は詞書を「山寺に籠もりて日頃侍りて、女のもとへいひつかはしける」とする恋歌で、泰時の歌はそれを

冬の叙景歌に詠み換えている。その点では、定家学書が、後進に主題の転換と促す本歌取り説に沿っている。ただし、泰時のこの歌は、『続古今集』では雑上の時雨に寄せる述懐歌群（一六〇九～一六二三）の中に配されていて、異質である。それでも、この歌から三首（一六二三、四）は「木の葉」を共有していて、必ずしも配列が破綻しているようにも見えない。撰者は、この泰時の歌に、何らかの寓意を読み取っていたのだろうか。

なお、範永の歌は『後拾遺集』初出歌人の『詞花集』歌ではあるが、特に『続古今集』撰者の一人真観が、鎌倉中期文応元年（一二六〇）五月末に鎌倉で著した、『簸河上』の言説「後拾遺は見直し、ひたたけて取り用ゐることになんなりて侍り」に照らせば、これを本歌と見てよい。三代集歌人の用詞を拠るべき古歌詞と説く（従って本歌取りする古歌は三代集歌人の古歌ということになる）定家の『近代秀歌』『詠歌大概』の成立当時に、泰時は二・三十代であり、歌人としてその影響下にあったと見てよいであろう。が、それは同時に、院政期本歌取りの方法を肯定する順徳院の『八雲御抄』の当代でもあって、定家の本歌取りの方法が当時の歌人の詠作に完全には実現していないことを考えれば、真観の所説は、そこに至るまでの鎌倉前中期の和歌の実態を反映したものであると見てよい。関東歌人泰時の歌もその中に含まれるのであり、特に前執権の歌として、将軍宗尊親王に献じられたはずの『簸河上』を書いた真観にとっては、無視できないものであったと考えるのである。従って、『簸河上』の所説に沿って泰時の本歌取りを認定することには一定の合理性があると思われるのである。

一首の景趣は、家隆の「春風に下行く波のかず見えて残るともなき薄氷かな」（六百番歌合・春・春氷・三一。三百六十番歌合・春・一四。玉吟集・三〇三。風雅集・春上・三五）に倣っていよう。とすれば、泰時の詠作意図が叙景にあることは明らかである。ちなみに、後鳥羽院の「木の葉敷く山下水の薄氷ひとへに秋を結ぶなりけり」（後鳥羽院御集・元久元年十二月八幡卅首御会・冬・一二一九）は、山中の薄氷に「木の葉」を詠み併せる点で先行例で

はあるが、氷と木の葉の関係は上下が逆である。その点では、泰時詠は「山川の紅葉の上の薄氷木の間洩り来し月かとぞ見る」（内裏百番歌合建保四年・冬・一二五・公経。続拾遺集・冬・四二四）に同じである。『内裏百番歌合建保四年』の公経詠と泰時詠との先後は不明ながら、泰時が、頼朝の姪婿で後には関東申次となる程に鎌倉幕府と親近していた西園寺公経（後に四代将軍となる頼経の外祖父）の歌に着目して倣ったのであれば、この泰時詠は、泰時三十四歳の建保四年（一二一六）の同歌合催行の閏六月九日以降の作ということになり、また泰時の京都歌壇の作品を貪欲に学ぼうとする姿勢を見ることになる。泰時が公経詠を見習ったのではないとすれば、京都の権門歌人と同様の詠作を成す泰時の歌力を見ることになる。

「下に木の葉ぞ見えて流るる」の趣向を構えた表現が新鮮である。薄氷の下を流れる木の葉が見えるという、対象を微細に凝視する叙景は、京極派に通う趣がある。事実、泰時歌の先蹤と言える家隆の一首は、『風雅集』に撰入されている。「見えて流るる」の直叙に、武家歌人らしさを見ることもできる。この措辞は古く、「糸とさへ見えて流るる滝なれば絶ゆべくもあらず抜ける白玉」（貫之集・女どものたきみたる所一七八。古今六帖・第三・たき・一六九三）の作例がある。また、後出では「咲き咲かずうつろふ菊の下水に花の淵瀬ぞ見えて流るる」（基綱集・菊花半開延徳元九五庚申当座・一〇六春）他が見える。作例は稀少で、たとえ貫之の歌に学んだのだとしても、泰時の用詞に特徴を見ることは許されるのではないだろうか。

総じてこの歌は、歌人泰時の水準と個性が見える一首である。

10　世をうみの海人の小舟の綱手縄心のひくに身をなまかせそ（続古今集・雑中・題不知・一六四五）

訳　生涯を海で生業する海人が、小舟の綱手縄を引いて暮らすのに身を任せる、それならず、世の中が憂く辛いからといって、心の誘い惹くままにその身を任せけることはするな。

「海人の住む浦漕ぐ舟の楫をなみ世をうみ渡る我ぞ悲しき」（後撰集・雑一・定めたる男もなくて、物思ひ侍りける頃・一〇九〇・小町）を本歌にする。初句は、「世をうみの泡と消えぬる身にしあれば恨むることぞ数なかりける」（後撰集・恋二・六一七・藤原仲平）に拠っていようか。同時に、西行の「おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの思ひは」（新古今集・雑下・一七四九）にも負っているのではないか。また、実朝の「世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも」（新勅撰集・羇旅・五一五。金槐集・雑・舟・六〇四）に相似する。実朝の歌と泰時の歌との先後は、不明である。実朝の歌に泰時が倣ったと見ることもできるが、九歳年長の泰時の歌に実朝が触発された可能性も捨てきれないのである。

「世をうみの」は、「世を憂み」（世の中が憂く辛いので）に「世を海の」（一生を海に暮らす）が掛かり、「海人の綱手縄」へ続く。ここまでが有意の序とも言え、「引く」（綱手縄を引く）を起こし「心の惹く」（心が誘う）が掛かる。「身をなまかせそ」は、「海人」が「身を」「まかせ」に、「世を憂み」とする人に対して言う「身をなまかせそ」が掛かる。

　先行歌に依拠しつつ掛詞（あるいは比喩）を仕込んで、新しさのある歌境を詠じている。それは、『続古今集』の前後の両首、「限りあれば霞まぬ浦の波間より心と消ゆる海人の釣舟」（一六四四・藤原隆祐）、「蘆根はふ入江の小舟さすがなほうきにたへても世を渡るかな」（一六四六・円勇法師）と比較するとよく分かる。下句に戒めを読み取れば、道歌に通じる趣の一首ということとなる。→2。

11　思ひやる心は常に通ふとも知らずや君が言伝てもなき（続古今集・雑下・高弁上人に申しつかはしける・一八四〇。明恵上人集・武蔵守泰時消息を送らるるついでに・一二七）

訳　あなたを思いやる私の心は常にそちらへ通っているとしても、そうだとも知らないのか、あなたからの言伝もないことだ。

「思ひやる心は常に通へども逢坂の関越えずもあるかな」（後撰集・恋一・五一六・三統公忠）を本歌にする。恋歌の本歌の「逢坂の関」は、男女が逢う一線・境界を寓意する。泰時在洛時か否かは分からないが、仮に在洛時であったとしても、泰時は関東本拠の者として、近江国の歌枕でもある実際の「逢坂の関」が、洛外栂尾の明恵とを隔てるものであることを意識して本歌を借りて言外にこれを仕込んだのであろう。明恵がまた、その本歌取りの意図を理解することも期待していたのではないか。

「とも」は、本歌の「ども」を承けた逆接の接続助詞「とも」に、「しらずや」が受ける格助詞と係助詞の「とも」が掛かると解する。

第四句「知らずや君が」の類例は、古く「蘆たづのすまふ入江の白菅の知らずや君は我が恋ふらくを」（古今六帖・第六・つる・四三五四・人丸）があるが、泰時がこれを見習ったとは断言できない。また、結句の「言伝もなき」の用例も早く、「山賤の垣ほに這へる青つづら人はくれども言伝もなし」（古今集・恋四・七四二・寵）や「恋ひ死しなば恋ひも死ねとや玉桙の道ゆき人に言伝もなき」（拾遺集・恋五・九三七・人麿）があり、後者に倣った可能性はより高いであろう。古い先例のある詞を用いているが、下句の言い方には率直さがあると言ってよい。

「高弁上人」の「返し」は、「人知れず思ふ心の通ふこそ言ふにまされるしるべなるらめ」（一八五〇）である。一首の意味は、「人知れず（互いに知られることなく）思う心が通うことこそが、言伝などを言うのにも優る、通って

いく心の道案内であるのだろう。」ということ。音信の無さを咎める体の率直な武士の物言いの贈歌に、心通うことの本質を諭した遁世僧らしい返歌の贈答である。

泰時と明恵とが、いつ関わりを持ち、この贈答がいつ行われたかは未詳である。高弁上人明恵が、仁治三年（一二四二）六月十五日に六十歳で没する以前ではある。両者が面会した、あるいは泰時が在京の折に消息したとすれば、泰時の承久三年（一二二一）五月に承久の乱で西上・貞応三年（一二二四）六月に父義時の死で東下の折か、または、嘉禎四年（一二三八）三月〜十月の将軍頼経上洛・帰東随行の折か、であろう（→5）。ちなみに、畠山重忠は、建久六年（一一九五）四月五日に、栂尾に参向して明恵に謁している。この記事が『吾妻鏡』に見える明恵の唯一の記事である。

④続拾遺集　亀山院下命。藤原為氏撰。弘安元年（一二七八）十二月二十九日奏覧。位署「平泰時朝臣」。尊経閣文庫蔵本（伝飛鳥井雅康筆）。

12　ほのぼのと明けゆく山の高嶺（たかね）より霞（かすみ）ににほふ花の白（しら）雲（続拾遺集・春下・題しらず・八一）

訳　ほんのりと夜が明けて行く山の高嶺から、霞に照り映えて見える花の白雲よ。

霞に照り映える白雲（桜花）の景趣としては、式子の「待たれつる花の盛りか吉野山霞の間よりにほふ白雲」（式子内親王集・〔前小斎院御百首〕又・春・一〇九）に通うが、泰時がこれを知り得たかは分からないし、これに拠らなくとも詠出できたであろう。

「ほのぼのと明けゆく山」の先行例は、「独り寝の恋の煙やほのぼのと明けゆく山の峰の横雲」（右大臣家歌合安元元年・暁恋・四二・清輔）がある。順徳院には、「ほのぼのと明けゆく山の桜花かつ降りまさる雪かとぞ見る」（紫禁集・同比〔建保四年三月十五日比〕、二百首和歌・八一四。万代集・春下・朝落花といふことを・三六六）があるが、泰時の歌の詠作時期が分からないので、先後は未詳で、影響関係を推測し難い。後出の亀山院の「ほのぼのと明けゆく山の高嶺より横雲かけて降れる白雪」（新後拾遺集・冬・曙雪をよませ給うける・五三三）は、順徳院の一首か、この泰時の歌に倣った可能性を見てよいかもしれない。

「高嶺より」は「にほふ」にかかる。類詠に「桜花うつろふ山の高嶺よりあまぎる雲ににほふ春風」（続後撰集・春中・入道前摂政家歌合に、雲間花・一〇八・成実）がある。これは、貞永元年（一二三二）七月の「光明峰寺入道摂政家七首歌合」（散佚）の一首である。その歌合の詠作を泰時が参照し得とすれば、道家と関東との関係の深さや泰時の道家の歌業への注目度の高さ故ということになろうが、そこまでの関係性をこの両首に見る必要はないのかもしれない。

「霞ににほふ」の句は、家隆の「見しよりも色こそ浅くなりにけれ霞ににほふ古里の梅」（玉吟集・百首和歌初心〔堀河院百首題〕・春・梅・七）が早い。より視覚に傾いた類例には、秀能の「鼻の色はそれとも見えぬ雲ゐより霞ににほふ天の香具山」（如願法師集・詠百首和・春・一五八）がある。泰時が何に学んだかは分からないが、新古今時代以降の新しい句形を用いていることは確かである。

霞に包まれた高嶺の山桜の盛りを、白雲が照り映えるように見えることで表した雅趣の一首である。和歌の伝統に沿っているが、その表現は、新古今時代以降の比較的新しい歌に類していて、泰時の志向を示唆しているように思う。

13 恋ひ恋ひて初音は聞きつ郭公ありし昔の宿な忘れそ（続拾遺集・雑春・五三九）

訳 恋いに恋いて、ようやく（今年の）初音を聞いた。時鳥よ、かつての（よく訪れていた）昔のこの家を忘れてくれるな。

『続拾遺集』の部立名は「雑春歌」だが、その巻第七（四七〇～五五八）の後半部（五三四～五五八）は「雑夏歌」である。詞書は「世を遁れにける人の卯月の比詣で来て、申すこと侍りける後、つかはしける」で、「出家遁世してしまった人が、四月の頃にやって来まして、お話しすることがあった後で、遣わした（歌）」ということだが、具体的なことは分からない。「郭公」は、「世を遁れにける人」を寓意する。常に泰時邸を尋ねていた人が出家後に疎遠になったことを嘆き、それ以来初めて訪れて声を聞かせてくれた喜びを表明しつつ、爾後の変わらぬ訪問を請う意味合いの一首であろう。

一首は、「聞かばやなそのかみ山の時鳥ありし昔の同じ声かと」（後拾遺集・夏・一八三・皇后宮美作）を本歌にする。『後拾遺集』初出歌人皇后宮美作の歌を本歌とみることについては、9に記した。

「恋ひ恋ひて」と「郭公」の詠み併せの先行例は、定家の「忘られぬ去年の古声恋ひ恋ひてなほめづらしき郭公かな」（拾遺愚草・夏・詠四十七首和歌・三一九八。風雅集・夏・三二八・定家）が、目に入る程度である。泰時がこの定家の歌に倣ったのだとすれば、その学習範囲が、相当に広範である可能性を見ることになるのかもしれない。少なくとも、新古今時代の中心歌人の作に似通う歌を泰時が詠じたていたことは確かである。

14 尋ぬれば理はなしとにかくに人の嘆きを我が愁へつつ（続拾遺集・雑中・述懐の心を・一一七六）

訳　探し求めていってみると、世の中に道理はないのだ。あれもこれも、人々の嘆きを、私の愁えとして思い悩みながら。

『続拾遺集』では、「述懐の心を」の詞書の下で、為家の「思ふほど心を人に知られねば憂しといふにも理はなし」（続拾遺集・雑中・一一七五）に続いて配されている。「理はなし」が共通するが、両首の意味は少し異なっている。為家詠のそれは、「人」が理解する説明はできないといった趣意で、泰時詠のそれは、筋道の通った道理が存在しないといった趣意であろう。

「とにかくに」は、勅撰集では、恋の思いについて言う歌（拾遺集・恋五・人麻呂・九九〇、後拾遺集・恋三・七二九・惟規、千載集・恋二・七二六・良経）が先行し、述懐の初出は『続後撰集』の「とにかくに身の憂きことの繁ければひとかたにやは袖は濡れける」（雑中・一一七九・八条院高倉）である。それも、我が身の憂さ・嘆きに言っていて、それは和歌ではむしろ当たり前のことなので、泰時の歌の「とにかくに」以下の表現の特異さが際立つ。「人の嘆き」の「人」が、自分と直接関わる人例えば恋の相手などの意味ではなく、ほとんど民人の意味合いで用いられていることは、伝統的ではない。実朝の「塔を組み堂を造るも人の嘆き懺悔にまさる功徳やはある」（金槐集定家所伝本・雑・懺悔歌・六一六）の「人の嘆き」に通じるのである。両首の主旨は同じであろう。

後出だが、類想の一首に「身の愁へ人の嘆きもかずかずにさも定めなく見つる夢かな」（続門葉集・雑下・なげく事侍りける比、又僧正親玄母のいとまにて籠りけるに申しつかはし侍りける・八六四・法印静運）がある。自身の愁えや人の嘆きの多さが、無常に世の中に見る夢だとする、この歌に比べてみても、道理の無い世の中で他人の嘆きを自分の憂えとする泰時の歌には、世上に評価が高い執権泰時の意思と人となりが窺われる。↓2。

⑤新後撰集　後宇多院下命。二条為世撰。嘉言元年（一三〇三）十二月十九日奏覧。位署「平泰時朝臣」。書陵部蔵二十一代集本（五一〇・一三。兼右本）。

15　思(おも)ふには深(ふき)き山路(ち)もなきもの(物)を心の外になに尋(たつ)ぬらん（新後撰集・雑中・題しらず・一三七〇）

訳　思う（心の中）には、（迷うような）深い山路もないのに、（すべて世の中は心であるはずの）心以外にどうして探し尋ねるのだろうか。（ただ心を追尋すればよいのだ）。

「散る花も惜しまばとまれ世の中は心の外の物とやは聞く」（後拾遺集・釈教・三界唯一心・一一九一・伊世中将）を本歌にすると見る。『後拾遺集』のみ入集の歌人の歌を本歌と見ることについては、9に記述したことに準じて考えたい。とすれば、『華厳経』が説く「三界唯一心」即ち、一切衆生が生死輪廻する欲界・色界・無色界の全世界は、悉く心が作り為したものに他ならず、あらゆる現象は一心から現出したものである、という思想を踏まえた雑歌として、釈教の趣が強い述懐歌ということになる。しかしむしろ、この泰時詠には、道歌への傾きも読み取るべきではないだろうか。同じようにこの『後拾遺集』歌を踏まえたと思しい、「思ひ入れば人も我が身もよそならず心の外の心なければ」（続古今集・釈教・七九八・道家）との先後は不明だが、この道家の歌は、事前事後に関わらず泰時の視野に入っていたかもしれない。

「深き山路」の詞は、例えば「入りしより雪さへ深き山路かな跡尋ぬべき人もなき身に」（続後撰集・雑上・大峰にてよみ侍りける・一〇九九・行尊）のように、修行者が求道に分け入る所の印象があるので、それを意識して用いているのであろう。

後出の「二つなき心の外を尋ぬとてあらぬ道には迷ふなりけり」（閑月集・釈教・釈教歌の中に五二九・前大僧正仙朝）や「おろかにぞ心の外を尋ぬとてうへなき道になほ迷ひぬる」（雅世集・尺教・六九二）は、泰時の歌と同じ主旨を詠じた同工異曲と言ってよい。

⑥玉葉集　伏見院下命。京極為兼撰。正和元年（一三一二）三月二十八日奏覧、同二年（一三一三）十月完成。位署「平泰時朝臣」。書陵部蔵二十一代集本（五一〇・一三。兼右本）。

16　年を経て花の都の春に逢ひて風を心に任せてしかな（玉葉集・雑一・一八九七。万代集・春下・題不知・二八一、三句「春に逢ひぬ」五句「任せてもがな」）

訳　長い年月を経て、花の都の花咲く春に逢って、花を散らす風を自分の心の思うに任せたいし、私の風邪も思いのままに任せて治したいものだ。

詞書は「都に住み侍りける弥生の比、この程風心ち侍るよし、人のもとへ申しつかはしけるついでに、書き添へ侍りける」。意味は「都に住んでおりました三月頃、最近風邪気味であります旨を、人の許へ申してやったついでに、書き添えました（歌）」ということ。「人」は、「返し」の作者「蓮生法師」即ち宇都宮頼綱を言う。泰時は、承久三年（一二二一）の承久の乱に際して、幕府軍の総大将として五月二十二日に鎌倉を発ち、六月十五日には京都を制圧する。その後泰時は六波羅の北方に留まり（南方は時房）、それがそのまま戦後処理の過程で設置の六波羅探題の北方となり、貞応三年（一二二四）六月十三日の父義時の急死で同月二十六日に鎌倉に戻るまで、京都に在った（以上吾妻鏡等）。従って、該歌は恐らく貞応二年（一二二三）か同三年（一二二四）の三月の作であろう。

「花の都」は、都を誉め讃えて言い、弥生に桜の花が咲く都の意が重なる。「風」は、空気の流れの意に、詞書の「風心ち」から、風病（風邪）の意が掛かる。

一首は、「山高み見つつ我が来し桜花風は心に任すべらなり」（古今集・春下・八七・貫之）を本歌に取っていよう。微かに狂歌の趣があろうが、春の花の歌を雑の人事詠に転じて、古歌の詞を取り心を新しくする定家本歌取り説の考え方には沿っていよう。

別に泰時は、「我が宿の桜なれども散る時は心にえこそ任せざりけれ」（詞花集・春・四一・花山院）も意識していたかもしれない。初二句の先行類例には「年を経て花の都に住むかひは卯月の忌みにもれぬなりけり」（殷富門院大輔集〔続群書類従本〕・一〇四）がある。

宗尊の「年を経て身に添ひながら恋しきは花の都の春の面影」（中書王御詠・春・東に侍りし時、春歌とて・三三）には、泰時の歌の影響があるかもしれない。

参考までに、「蓮生法師」の「返し」「吹く風も君が心に任（まか）せては都（みやこ）のどけき花をこそ見（み）め」（一八九八）を読んでおく。歌意は「花を吹く風も風邪も、あなたの心の思うに任せていれば（静まって）、都はのどかで、そのうららかな花を見ることでしょう。」ということ。この「風」も、贈歌を承け、空気の流れの意と風病の意の掛詞。「都のどけき花」は、「都のどけき」から「のどけき花」へ鎖る。

この歌は、桜を吹く風の静謐と泰時の風邪の平癒祈願に寄せて、「吹く風」に承久の乱を、「都のどけき」に戦後の平穏を寓意して、乱に軍功を挙げ、六波羅に駐留して都を治安した泰時への祝意を表そうとした一首であろう。

蓮生頼綱は、この時京都の嵯峨に在ったと思しい。頼綱が、嵯峨に隠遁するきっかけは、元久二年（一二〇五）閏七月のいわゆる牧氏の変であった。頼綱の岳父北条時政と、その妻で頼綱の姑に当たる牧の方とが、三代将軍源実朝

の殺害を謀ったとされる。時政女政子と男義時により実朝は庇護され、この企ては失敗し、時政と牧の方は出家して伊豆北条に退隠させられる。この変事に、頼綱自身も謀反の嫌疑を掛けられた。曲折があり追討を免れた頼綱は、謀反の意なきことを陳述して八月十六日に下野で一族郎党六十余人と共に出家し、なおも十九日に鎌倉で北条義時に献髻して陳謝の意を示した。その後は、京都の嵯峨山荘に隠棲したのである。その間、法然の弟子証空に師事し、豊富な財力を以て、京都周辺や下野の寺院堂舎の修復・建立に寄与したらしい。承久三年（一二二一）の承久の乱の際に頼綱は、義時以下と同じく「宿老」として、上洛せず鎌倉に留まり守っていて、戦後に功績で伊予国守護職を付与されている。御家人としての地位を確保していたのである。承久の乱の後には、京都に戻り、少なくともこの時には嵯峨に滞在していたのであろう。

⑦続千載集　後宇多法皇下命。二条為世撰。文保三年（一三一九）四月十九日四季部奏覧、元応二年（一三二〇）七月二十五日返納。位署「平泰時朝臣」。書陵部蔵二十一代集本（五一〇・一三）。兼右本）。

17　もろこしの浪路分け行く舟人は心残らぬ月や見るらん（続千載集・秋下・秋歌の中に・四九〇。雲葉集・秋中・題しらず・五六七）

訳　唐土までの波路を分けて行く舟人は、心残りもなく月を見るのだろうか。

「遥かなるもろこしまでも行くものは秋の寝覚めの心なりけり」（千載集・秋下・三〇二・大弐三位。続詞花集・秋下・二五七。大弐三位集・四三。定家八代抄・三九八）の影響下にある一首であろう。より直接には、この大弐三位の歌に拠った定家の、「心のみもろこしまでも浮かれれつつ夢路に遠き月の頃かな」（千五百番歌合・秋三・

一三九七・定家。拾遺愚草・一〇四七。続古今集・秋上・四一一）や「心こそもろこしまでもあくがるれ月は見ぬ世のしるべならねど」（拾遺愚草・初学百首・秋・四一）に刺激されたのかもしれない。そうだとすれば、泰時が、定家の歌に特に目を向けていた可能性を見なければならない。

それにしても、「浪路分け行く舟人」や「心残らぬ月」は、平易な語彙の組み合わせながら、歌詞としては伝統的ではなく、また後出例も見ない。特に「心残らぬ月」は、月が行く遙かな西方の「もろこし」までの「浪路」なのだから、そこを「分け行く舟人は」は、さぞ心残りもなく月を見るのだろうか、という素朴な理屈立てを言った措辞なのであろう。武士歌人泰時の詠みぶりの一面である。藤原基家が『雲葉集』に撰歌したのは、泰時の鎌倉幕府執権としての地位を度外視して歌のみを評価したとまでは言えないにしても、後年に二条為世が『続千載集』に撰入したことは、『雲葉集』採録歌への評価の側面がより強いと見てよいのであろう。

なお、宗尊の「はるかなるもろこし舟の波路にも同じ国とや月を見るらむ」（柳葉集・巻一・弘長元年五月百首歌・雑・六〇）に、泰時のこの歌が影響を与えているかもしれない。

⑧続後拾遺集　後醍醐天皇下命。二条為定撰。正中二年（一三二五）十二月十八日奏覧（四季部）、嘉暦元年（一三二六）六月九日返納。位署「平泰時朝臣」。書陵部蔵二十一代集本（五一〇・一三。兼右本）。

18　露深く忍びしものを篠薄ほに出でにける我が思ひかな（続後拾遺集・恋一・題しらず・六八五）

訳　露が深く（置く篠薄）、それならず深く忍んでいたのに、篠薄の穂が出るように、ほに出て表に現れてしまっ

た、私の恋の思いであることだな。
「露深く」から「深く」を重ねて「深く忍びしものを」へ鎖る。「篠薄」は、まだ穂が出ていない薄で、「穂」と「秀」の掛詞で「ほに出でにける」（人目につくように外に現れてしまったの意）を起こす。
一首は、「篠薄忍びもあへぬ心にて今日はほに出づる秋と知らなん」（後拾遺集・恋一・六一九・輔親）を踏まえる。深津睦夫『続後拾遺集』（明治書院和歌文学大系、平九・九）は、これを「参考」として挙げる。本歌と見てもよいであろう。
同じ歌を本歌にした歌には、後鳥羽院の「秋風の吹きにし日より篠薄忍びもあへずほに出でにけり」（正治後度百首・秋・草花・二八）や範宗の「風もなほ下に忍びし篠薄ほに出でぬ秋の夕月夜かな」（洞院摂政家百首・秋・早秋・五五二）がある。その『洞院摂政家百首』の同題詠には、但馬の「夏草に忍びしものを鈴虫のふり出でてなく秋は来にけり」（秋・早秋・五九五）もあって、泰時詠が後出ならば、「忍びしものを」の用詞をこれに学んだ可能性はあろう。なお、関東祇候の廷臣藤原顕氏の「さのみよも忍びは果てじ篠薄今はほに出でてかくと知らせよ」（宗尊親王百五十番歌合弘長元年・恋・二四三・顕氏。従二位顕氏集・将軍家御歌合　弘長元年七月七日・恋・九、結局「かくと知らせむ」）も、同じく『後拾遺集』の輔親の歌の本歌取りであろう。

⑩新千載集　後光厳天皇下命。二条為定撰。延文四年（一三五九）四月二十八日四季部奏覧。十二月二十五日返納。位署「平泰時朝臣」。書陵部蔵二十一代集本（五一〇・一三。兼右本）。

19　時鳥人づてにのみ聞く頃(ころ)は身の数ならぬ音(ね)こそなかるれ（新千載集・夏・人伝郭公といふことをよめる・

二二七。題林愚抄・夏上・人待郭公・新千・一九四〇）

訳　時鳥（の鳴いたこと）を、人づてにばかり聞く時分は、時鳥が声を上げて鳴くならず、ものの数にも入らないこの身の声を上げて、つい泣いてしまうことだ。

「人伝郭公」は、『為忠家後度百首』で設けられた題で、勅撰集にはこの泰時の歌が見えるのみである。

「人づて」に「聞」く「時鳥」は、「さ夜ふけて寝覚めざりせば郭公人づてにこそ聞くべかりけれ」（拾遺集・夏・一〇四・忠見。内裏歌合天徳四年・郭公・二八。和漢朗詠集・夏・郭公・一八五）が古く、泰時詠もこの延長上に位置付けられる。「鳴かるれ」と「泣かるれ」を掛けた、「時鳥」の「音こそなかるれ」は、同じ『拾遺集』に「来ぬ人をまつちの山の郭公同じ心に音こそなかるれ」（拾遺集・恋三・八二〇・読人不知）があって、泰時はこれに拠っていようか。

「人づてにのみ」は「越えぬ間は吉野の山の桜花人づてにのみ聞き渡るかな」（古今集・恋二・五八八・貫之）、「身の数ならぬ」は「逢ふことの年ぎりしぬるなげきには身の数ならぬものにぞありける」（後撰集・雑三・一一九七・清和院君）が、それぞれの原拠で、泰時はこれらに学んだと思しい。

とすれば、一首全体に三代集歌に負った詠作ということになろう。それでも、下句に述懐性が漂うところに、特徴を見るべきであろうし、それが14の歌に近い述懐だとすれば、「身の数ならぬ音こそなかるれ」は、おのれ一人の身の不遇の詠嘆というよりは、世上の理不尽に対して無力な自分の慨嘆と読むべきかもしれない。

20　風まぜにみ雪降（ふ）り頻（し）く山里（さと）のあさの狭衣（さころも）いかに冴（さ）ゆらん（新千載集・雑上・一八二九）

訳　風まじりに雪が頻りに降る（あなたの住む）山里の朝の、（あなたの著る）麻の狭衣は、どれほど冷たく冴えているのだろうか。

『新古今集』の「風まぜに雪は降りつつしかすがに霞たなびき春は来にけり」（春上・八・読人不知。原歌万葉集・巻十・春雑歌・一八三六・作者未詳、初句「風交じり」結句「春さりにけり」）を本歌とする。里人の常用する麻衣の「麻の狭衣」の句も、勅撰集では『新古今集』（四七九・宮内卿、一一〇八・良経）が初例となる。泰時歌は、「山里の朝」から「あさ」を掛詞に「麻の狭衣」へ鎖る。

詞書は「藤原基綱山里（さと）に侍りけるに、申しつかはしける」とある。「藤原基綱」は、有力御家人後藤基綱のこと。基綱は、断養和元年（一一八一）生まれ、康元元年（一二五六）十一月二十八日に七十六歳で没した。承久の乱で袂を分かった実父基清を自ら断首して、自身と後藤家の鎌倉幕府に於ける地位を保全したのである。泰時は、後藤基綱より二歳年少である。嘉禎元年（一二三五）十二月の水争いによる興福寺衆徒の蜂起に、執権として断固たる態度（「御成敗之趣」）で臨んだ泰時の先兵は、検非違使に任じていた基綱であった。基綱は、これを話し合い（「問答」）で無事に収めてその功により賞された。基綱は、その他にも三浦と小山の争闘を鎮撫するなど泰時執権下の治安維持の役目を担い、また恩沢奉行等の重責にも任じており、将軍はもとより執権家の信任も厚かったと推察されるのである。

その基綱の「返し」は、「思へたださらでも冴（さ）ゆる山おろしに雪を重ぬる麻（あさ）の衣手（ころも）」（一八三〇）である。「いかに冴ゆらん」と問いかけられた基綱は、「風」を「山おろし」に具体化して、「山里」に吹く「山おろし」に「雪」が加わった「冴」えを訴える。「雪を重ぬる」は、「山おろしに」を承けつつ「麻の衣手」にもかかり、麻の衣の袖に雪が重ね置いたさまを言う。一首の意味は、「ただ思いやってみてくれ、そうでなくても冷たく冴える山から吹きおろす

風に、降りこむ雪をその上に重ねる（粗末な）麻の衣の袖を。」ということ。

この贈答は、実体験であろうか。もとより修辞上の誇張はあるにせよ、完全な虚構というよりは、「山里」と見なされる場所に基綱が居していたことで生まれた贈答と見るのが自然であろう。とすれば、その「山里」は何処であろうか。泰時は承久の乱に際して西上して六波羅に駐在し、基綱も従軍したのではあっても、その時に京都でかかる贈答が交わされたとは考え難い。泰時は、元仁元年（一二二四）六月十三日の父義時の死去により鎌倉に帰還して二十八日には執権職を継ぐが、一方でその後も職責上西上することが多かった基綱が、京洛近くの山里に居室を有していた可能性は絶無ではない。しかし、在鎌倉の泰時との間に、雪まじりの風の天気を機縁とした贈答は成立し得ないであろう。基綱の鎌倉の居館は鶴岡八幡の東方の大倉に在り、度々将軍以下を招じた雅宴・文事が催されていた。そこは、「此所素属二山陰一。閑寂幽棲也。加レ之紅葉緑松交レ枝之体。黄菊青苔帯レ露之粧。感荷非レ一。」（吾妻鏡）と評される場所でもあった。ここを「山里」と見なした上での贈答であったと考えるべきであろう。

いずれにせよ、自ら信任していたであろう基綱に対して、寒さを気遣う泰時の歌ということは動かない。そこに泰時の人となりを見ることは許されるであろう。同時に、西行の血筋に連なり風雅の人でもある基綱との間で本歌を共有したいという、泰時の歌人としての欲求もあったに違いないと考えるのである。

⑪新拾遺集　後光厳天皇下命。二条為明撰・頓阿完成。貞治三年（一三六四）四月二十日四季六巻奏覧。同年十月二十七日為明死去、十二月返納。位署「平泰時朝臣」。書陵部蔵二十一代集本（五一〇・一三。兼右本）。

21　あはれなり海人（あま）のまてかた暇（いとま）なみ誰もさてこそ世（よ）は尽（つ）くせども（新拾遺集・雑中・題しらず・一七三八）

訳　哀れに切ないことだ。海人の両手両肩が休む間も無くて、誰も皆そうやって一生涯を終えるのだけれども。

「伊勢の海の海人のまてかた暇なみ長らへにける身をぞ恨むる」（後撰集・恋五・九一六・源英明）を本歌にする。同時に、「白波の寄するる渚に世を尽くす海人の子なれば宿も定めず」（新古今集・雑下・一七〇三・読人不知）にも依拠していて、両首を本歌に取り併せたと見ることができる。

初句に「あはれなり」を置くことは古くからあるが、勅撰集では『新古今集』が初めてである。泰時詠は、それに適応していると言える。「まてかた」は未詳だが、「真手肩」、即ち左右両方の手と肩のことかとする現行説に従う。

実朝の「世の中はつねにもがもな渚漕ぐ海人のを舟の綱手かなしも」（新勅撰集・羇旅・五二五。金槐集・雑・舟・六〇四）に通う趣がある。その主調は、海人に代表される民人への深い情けであろう。ちなみに、この実朝の歌には従来も参考歌が指摘されてきたが、「あはなりゆくへも知らぬ浪の上にうき世を渡る海人の釣舟」（正治後度百首・雑・海辺・五八〇・家長）や「あはれなりいかにするがの田子の浦の海人のしわざと見るもはかなき」（明日香井集・大和多の浦にて、海人を見て・一五三二）など、新古今歌人達の「あはれなり」を初句に置いて「海人」あるいはその「舟」を詠嘆する歌々を前景に据えることができるように思う。とすれば、実朝の歌と泰時の歌との距離はより近いと言える。

二、北条泰時の現存歌を読むⅡ―私撰集他

引き続き、私撰集所収の泰時の歌を順次読んでゆく。『万代集』所収歌（二八一一）は16、『雲葉集』所収歌（五六七、八六四、九七二）は17、7、8、『六華集』所収歌（五八、一二六一、一五四九）は34、7、8、『題林愚

抄』所収歌（一九四〇、五二九二）所収歌は19、9、『六花集注』所収歌（一七）は34、で取り上げている。また、家集『明恵上人集』所収歌（一二七）は11、説話集『古今著聞集』所収歌（七）は2、で取り上げている。

⑫東撰六帖　後藤基政撰。正嘉元年（一二五七）十一月十日～正元元年（一二五九）九月二十八日。位署第一「平泰時朝臣」、抜粋本「平泰時」（三）「泰時」（他）。第一・春のみの零本と、第一～四・四季各部の抜粋本が現存。前者は島原図書館松平文庫本（一二九・一九。歌番号は新編国歌大観番号）。後者は祐徳稲荷神社寄託中川文庫本（国文学研究資料館データベースの画像データに拠る）、福田秀一「祐徳稲荷神社寄託／中川文庫本「東撰和歌六帖」（解説と翻刻）」（『国文学研究資料館紀要』二、昭五一・三）の翻印参照。

22　鶯（うくひす）の古巣にいかで告（つ）げやらむまだ冬ながら春は立ちぬと（東撰六帖・第一・春・立春・三。抜粋本・三）

訳　鶯の古巣にどうやって告げてやろうか。まだ（年内十二月の）冬ながら、既に春は立ってしまったと。

「冬住みし古巣は雪に埋もれて谷の鶯春と告ぐなり」（堀河百首・春・鶯・五五・仲実）を本歌のように踏まえていよう。作者仲実は『金葉集』初出歌人で、『堀河百首』の歌であるので、本歌取りの本歌とは見ないでおく。真観『簸河上』が「後拾遺はみなほし、ひたたけてとりもちゐることになんなりて侍り。金葉、詞花もさることどもにてはべるめれば、くるしかるまじきことにこそ。されども、三代集の歌などのやうに本とするまではいかが侍るべからん」と言うのは、泰時没後の文応元年（一二六〇）夏のことで、それも定家の三代集歌人の用詞を拠るべき古歌詞とする所説を援用し、三代集の後の勅撰集の所収歌に及ぼした言説ではある。泰時没後でも未だ『金葉集』『詞花集』

（の当代歌人の歌）は本歌取りの対照たり得ないことを、関東歌壇の指導的立場の歌人が述べていることに照らして、これを本歌取りと認定することは憚られるのである。→9。

それはともかく、主題は「年内立春」であろうが、一首には、谷から鶯を誘引して鳴くことを促すような含意を読み取るべきである。「冬」「春」「鶯」の詠み併せは、古く「冬ごもり春さり来らしあしひきの山にも野にも鶯鳴くも」（万葉集・巻十・春雑歌・一八二四・作者未詳）があるが、この「冬ごもり」は語義未詳で「春」の枕詞であり、「鶯鳴くも」と言っている点も含めて、泰時詠に直接関係はない。むしろ、「冬ながら」の詞につけば、その原拠は「冬ながら空より花の散り来るは雲のあなたは春にやあるらむ」（古今集・冬・雪の降りけるをよみける・三三〇・深養父）に求められるが、これは事実冬であることをいう歌であって、やはり泰時詠とは隔たりがある。また、「まだ冬ながら」の先行例の「雪降ればいや高山の梢にはまだ冬ながら花咲きにけり」（金葉集・冬・大嘗会主基方備中国弥高山をよめる・二八七・藤原行盛）も、大嘗会の屛風歌で「雪」を「花」に見立てる冬歌なので同様である。

泰時の一首と主意を同じくする歌の古い例としては、「（十二月）廿三日治部少輔大原今城真人之宅」の「宴歌一首」という「月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春は立ちぬとか」（万葉集・巻二十・四四九二・家持）を挙げるべきであろう。泰時がこの歌を知っていた可能性はあろう。

類想で、泰時詠に通うと見てよい歌は、泰時没後の『宝治百首』の「大空はまだ冬ながら行く雲に年をこめてや春は立つらむ」（春・歳内立春・四・基家）である。とすれば、泰時の歌が基家に影響した可能性を見たくなるが、それは無理があるかもしれない。それでも、京都の権門の歌想を、鎌倉武士が先取りしていることは見逃すべきではない。

23　滝つ瀬の玉散（ち）る岸（きし）の玉柳濡（ぬ）れて幾（いく）世の春か経（へ）ぬらん（東撰六帖・第一・春・柳・一三一。「世」は底本「せ（世）」。

「せ」の字母は「世」で、漢字の草体のように見えるが、振り漢字で明確にしようとしたか）

訳　滝の急流の沸き返る水の玉が散る岸に生える玉柳は、濡れていったい幾世の春が過ぎたのだろうか。

「奥山にたぎりて落つる滝つ瀬の玉散るばかりものな思ひそ」（後拾遺集・雑六・神祇・一一六三・貴船明神）を本歌に、「滝つ瀬の玉散る」の詞を取ったと見る。同時に、「青柳の糸に玉貫く白露の知らず幾世の春か経ぬらむ」（新古今集・春上・七五・有家）に倣っていよう。

「滝つ瀬」と「幾世」の詠み併せは珍しい。定家に「わき返り落つれば氷る滝つ瀬の下にくだけて幾世経ぬらん」（拾遺愚草・恋・恋歌とて・二六〇五）があるが、これは、恋の涙を比喩して「滝つ瀬」と言い、心砕けて幾世が過ぎたかという趣旨であり、泰時詠に直接の関係性はないであろう。また、「岸」の柳が「幾世の春」を経過したかを言う例も多くはない。先行例に、「岸の上の柳はいたく老いにけり幾世の春を過ぐし来ぬらん」（嘉言集・一五。風雅集・春中・一〇五・大江嘉言）があるが、泰時がこれを知っていたとは考えにくい。さらにまた、岸の柳が濡れることを言う例は稀少で、泰時のほぼ同世代の源通方の「濡れて干す緑も深し春風に波寄る岸の青柳の糸」（続古今集・春上・岸柳を・七二）があるが、泰時詠との関係は分からない。

勅撰集歌に依拠しつつも、比較的珍しい詞の用い方で目新しい景趣を詠出した一首だと言える。

24　来（こ）し方（かた）もなほ（を）行く末も霞（かす）みつつ雲雀（ひばり）ぞ上（あ）がる武蔵（むさし）野の原（東撰六帖・第一・雲雀・一三九）

訳　やって来た方もさらに行く先の方も霞みながら、雲雀が上がる武蔵野の原よ。

霞の中で「野」「原」に「上がる（立つ）」「雲雀」の景趣は、『六百番歌合』の春部の「雲雀」題に「雲雀上がる春

の焼け野の末遠み都の方は霞なりけり」、「はるばると荻の焼け原立つ雲雀霞のうちに声上がるなり」、「春深き野辺の霞の下風に吹かれて上がる夕雲雀かな」（八八・家房、九三・季経、九四・慈円）が見える。泰時はこれらに学んでいよう。

武蔵野国の歌枕「武蔵野」は、広大なことを言うのが本意で、泰時もそれをある程度の実感を伴って認識していたであろう。「武蔵野を霧の絶え間に見渡せば行く末遠き心地こそすれ」（後拾遺集・賀・四二七・兼盛）や、それを踏まえた「行く末は空も一つの武蔵野に草の原より出づる月影」（新古今集・秋上・四二二・良経）は、泰時も意識していたであろう。あるいは、為家の「行く末は霞める方を限りにて山こそ見えね武蔵野の原」（洞院摂政家百首・雑・眺望・一七一八）も泰時の視野に入っていたかもしれないが、詠作時期の先後は不明である。

「雲雀」はその「武蔵野」本来の景物ではなく、それを詠じた歌は、『正治初度百首』の後鳥羽院詠「結び置きし雲雀の床も草枯れてあらはれ渡る武蔵野の原」（鳥・九六。後鳥羽院御集・九三。秋風集・冬上・四九二）が目に付く程度である。泰時は、これを見知って、これに依拠したのではないか。

なお、初二句を同じくする歌に、「来し方たもなほ行く末も降る雪に跡こそ見えね帰る山人」（建保名所百首・雑・還山越前国・一〇〇八・康光）があるが、これに拠らなくとも詠出し得たであろう。

この泰時の歌は、広い意味の新古今時代の歌に泰時が目を向けていたであろうことを示す一首だと言ってよい。

25　春風や知らで過ぎけん奥山の青葉にまじる花の一枝（東撰六帖・第一・春・桜・二四九）

訳　春風は知らないで吹き過ぎていったのだろうか。奥山の青葉に交じって（散り残っている）花の一枝よ。

「夏山の青葉まじりの遅桜初花よりもめづらしきかな」（金葉集・春・九五・盛房）に依拠した一首である。この盛房歌の「青葉」に「まじ」る「花・桜」の景趣は、後代に多くの派生歌を生んでいる。新古今時代では例えば、「夏木立青葉まじりの花もあればなほ染めかへじ今日の袂は」（正治初度百首・夏・一二二四・隆信）がある。泰時の一首はその景趣に、「春風や知らで過ぎけん」と趣向を加えて「花の一枝」を詠じた、そこに新味がある。「花の一枝」の詞は、定家の「闇ならば折りて帰らむ時の間に暮れぬ山路の花の一枝」（拾遺愚草員外雑歌〔新編私家集大成CD－ROM版〕・一字百首・二九九八）が早く、泰時がこれに学んだ可能性はあろう。『宝治百首』の「春といひて日頃はあれどあるかひは今日し桜の花の一枝」（春・初花・五〇五・寂西）は泰時没後で、また時季を異にする。

宇都宮景綱の「咲きまじる青葉に花の隠ろへて枝に少なき遅桜かな」（沙弥蓮愉集・春・一一六）は、同じく盛房歌を踏まえていようが、「隠ろへて」「枝に少なき」には、泰時の一首からの影響が認められようか。また、笠間時朝の「咲きにけり青葉にまじる遅桜のちの弥生を待ちやしつらん」（時朝集・未入集歌百五十首・春・閏三月花といふ事を・一六二）は、正確には泰時詠との先後は不明だが、恐らくは時朝詠が後出であろう。これも、盛房歌の景趣の範疇の歌だが、「青葉にまじる」の用詞には、泰時の歌からの影響を見てよいかもしれない。

その「青葉にまじる」はもちろん、「青葉まじり」（久安百首・一三二一・小大進にも「青葉まじりに」が見えるが、これは堀河百首・三四〇・師頼の「青葉まじらず」の詠み換え）からの派生だが、「に」を入れたこの句形は、泰時詠が早い例となる。後出は多い。少し挙例しておこう。「散りやらで青葉にまじる八重桜今日のためとやなほ残るらん」（閑月集・夏・鞠のかかりに遅桜の散り残りて侍りけるを・一一二・資季）、「み山木の青葉にまじる桜花たえだえかかる雲かとぞ見る」（実材母集・五〇七）、「里に散らば山路へ入らん時鳥青葉にまじる花を尋ねて」（他阿上人集・同〔文保〕二年、為相卿合点の歌、春・九五七）、「時過ぎて青葉にまじる遅桜春は梢にとまるなりけり」（新

千載集・夏・夏の歌の中に・一九三・崇光院）、「吉野山青葉にまじる遅桜夏と春との色は見えけり」（耕雲千首・夏・余花・二〇四。邦高親王御集・余花・一三九）等である。

26　散る花に馴れし形見を引き替へて今日立ち初むる蟬の羽衣（東撰六帖抜粋本・第二・夏・更衣・七九）

訳　散る桜の花、馴れていたその花の（春の）形見と引き替えにして、今日夏が立ち、更衣に裁ち始めた蟬の羽衣のように薄い夏衣（を着ること）よ。

「更衣」の題としては、「山吹の花の袂を脱ぎ替へて蟬の羽衣今日ぞ着るめる」（堀河百首・夏・更衣・三三二・永縁）や「今朝かふる蟬の羽衣着てみれば袂に夏はたつにぞありける」（堀河百首・夏・更衣・三三一・基俊。千載集・夏・一三七）の詠み方に倣っていようか。

「散る花」を春の「形見」とするのは、「散る花の忘れ形見の嶺の雲そをだに残せ春の山風」（新古今集・春下・一四四・良平。千五百番歌合・春四・五三四）に学んでいるのであろう。順徳院の「山人の霞を分くる袖の上に馴れし形見の花の香ぞする」（紫禁集・三月庚申夜、三首は替人、当座・霞隔残花・七六）にも通うが、泰時がこの歌を知り得たかは分からない。

また、「立ち初むる」の詞は、「めづらしく今日たち初むる鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな」（詞花集・賀・正月一日こうみたる人にむつきつかはすとてよめる・一六二・伊勢大輔）が勅撰集の初出である。この歌の「たち初むる」は、鶴の子が立ち始める意に、「襁褓（むつき）」を裁ち始める意が掛かるのであって、泰時詠とは異なる。泰時没後ではあるが、『宝治百首』の「せめてなほ春の形見を脱ぎ捨てて今日たち初むる夏衣かな」（夏・首夏・

八二六・為継）が、夏が「立ち初むる」と夏衣を「裁ち初むる」の掛詞で、泰時詠と同様である。泰時詠はまた、「（引き）替へて」に、「（蟬の羽）衣」の縁で、衣替へ（更衣）して（春の衣を夏の衣に「替へて」）の意が掛かる。

27　遠方の山隠（かく）れ行く蜀魄（ほととぎす）答（こた）ふる声ぞここに鳴くなる（東撰六帖抜粋本・第二・夏・郭公・一〇八）

訳　遠くの方の山に隠れ行く時鳥の、答える声が（今）ここに鳴いて聞こえることだ。

『万葉集』に現行訓「聞きつやと君が問はせる霍公鳥しののに濡れてこゆ鳴き渡る」（巻十・夏雑歌・問答・一九七七・作者未詳）とする歌がある。この結句の原文は「従此鳴綿類」で、西本願寺本・寛永二十年刊本他は現行訓に異ならないが、類聚古集は「ここになくなる」とする。また、この歌を引く『古来風体抄』も「ここに鳴くなる」（一〇三）である。この形の同歌を本歌に取ったと見る。「君が問はせる」に「答ふる声」で応じたということになるが、その「答ふる声」は、「時鳥忍ぶる頃は山びこの答ふる声もほのかにぞする」（千載集・夏・郭公の歌とてよめる・一五〇・賀茂重保）に拠っているのであろう。

「山隠れ」の「時鳥」の作例は少なくない。中で、実方が陸奥守として僻地に遠ざけれた自身を「時鳥」によそえた、「年を経て山隠れなる時鳥聞く人もなき音をのみぞなく」（拾遺集・雑春・陸奥国にまかり下りて後、郭公の声を聞きて・一〇七三。和漢朗詠集・王昭君・七〇五、初句「あしひきの」）は、泰時のよく知るところではあったろうから、これに負ったと見てよい。

なお、「遠方」の「山」の「時鳥」の鳴き声を言う先行歌に、「遠方や雲ゐの山の時鳥天つよそにも鳴き渡るかな」（永縁奈良房歌合・郭公・一七・三郎君）があるが、泰時の歌と直接の関係はあるまい。

28　渡りする淀の川瀬のいかならん水かさぞ増さる五月雨の比（東撰六帖抜粋本・第二・夏・五月雨・一四六）

訳　渡りをする淀川の瀬は今どのようであろうか。水嵩が増さる五月雨の頃は。

「杣人のとらぬ真木さへ流るなり丹生の川瀬の五月雨の比」（老若五十首歌合・夏・一四八・宮内卿）は、宗尊が「水増さる丹生の川瀬の五月雨に杣人知らぬ真木流るめり」（宗尊親王三百首・夏・八六）ともどいている。『老若五十首歌合』が、関東鎌倉にもたらされていたと見てよく、泰時が宮内卿の歌を知っていた可能性は十分にあるであろう。

「淀の川瀬」は、淀川の瀬のこと。「淀」は山城国の歌枕だが、「淀川」は摂津国・河内国に跨がる。「淀川」自体は、「五月雨は近くなるらし淀河の菖蒲の草もみくさ生ひにけり」（拾遺集・夏・一〇八・読人不知）と詠まれているが、泰時は「淀の川瀬」を、「かりくらし交野の真柴折り敷きて淀の川瀬の月を見るかな」（新古今集・冬・鷹狩の心をよみ侍ける・六八八・公衡）に学んだのであろう。泰時は、『拾遺集』歌を意識に入れているにせよ、公衡詠の「淀の川瀬」東岸の「交野」の鷹狩りに冬月を見る景趣を踏まえて、夏の五月雨頃の「淀の川瀬」の増水した景趣を思いやったようにも見える。

とすればこの歌も、泰時が新古今時代の歌に目を向けていたことを示す一首と言える。

なお、類歌「五月雨に水かさ増さりて浮きぬればさしてぞ渡る佐野の舟橋」（続古今集・夏・二四二・祐盛法師）は、作者祐盛の生年が元永元年（一一一八）であることから判断して、泰時詠に先行すると見てよいが、泰時がこれを知り得たとは考えにくい。

29　照(て)れば置き・曇(くも)れば置(を)かぬ夏の夜(よ)の月にしたがふ夜半(よは)の霜かな(哉)（東撰六帖抜粋本・第二・夏・夏月・一七八）

訳　（月が）照れば（霜が）置き曇れば置かない、夏の夜の月に従っている（置き置かぬする）夜半の霜（のように見える月の光）であることだ。

『白氏文集』（巻二十）の「江楼夕望招客」題詩で、『和漢朗詠集』に摘句された「風吹枯木晴天雨（かぜこぼくをふけばはれのてんのあめ）月照平沙夏夜霜（つきへいさをてらせばなつのよのしも）」（夏・夏夜・一五〇・白居易。千載佳句・夏夜にも）が、景趣の原拠である。この「月照平沙夏夜霜」を句題とした「月影になべて真砂の照りぬれば夏の夜降れる霜かとぞ見る」（千里集・月照平砂夏夜霜・三三）がある。一方で、「夏の夜の霜や置けると見るまでに荒れたる宿を照らす月影」（寛平御時后宮歌合・五〇・作者不記。古今六帖・第一・夏の夜・二八六。新撰万葉集・四五、二句「霜や降れると」結句「照らす月かな」。新撰和歌・一五一、初句「夏の夜に」二句同上。万代集・夏・洞院中宮百番歌合の歌・七三〇・読人不知、初句「夏の夜も」結句「照らす月かな」）や「夏の夜も涼しかりけり月影は庭白たへの霜と見えつつ」（後拾遺集・夏・二二四・長家）とも展開する。こういった歌の流れに沿った詠作ではあろう。

それでも、「照れば置き」「曇れば置かぬ」「月にしたがふ」の句は新味があり、泰時の詠作方法の特徴の一面を示すと言えるかもしれない。

同類歌「照れば置き曇れば消ゆる真砂地の霜かあらぬか夏の夜の月」（新三井集・夏・夏月・一五一・隆賢法師）は、恐らく後出で、泰時の歌に倣ったと見られる。

30　山深き杉の廬の村時雨憂き世の夢をおどろかせとや（東撰六帖抜粋本・第四・冬・時雨・三七〇）

訳　山が深い杉葺きの廬に降る村時雨よ。憂く辛いこの世の（覚めて悟らない）夢を、はっと覚醒させろというのか。

上句は、「見し人も問はでのみこそすぎの庵に絶えず音するむら時雨かな」（千五百番歌合・冬一・一七八九・越前）に負っているように見える。そうだとしても、冬の景趣を下句の述懐に結び付ける構成は新鮮である。「おどろかせとや」の句形も独自で新味がある。

「杉の廬」は、杉の皮で屋根を葺いた庵のこと。和歌の用例は古くない。建久三年（一一九二）三月の後白河院崩御の「三、四年の後、五月御供花の時、六条殿にて」詠んだという寂蓮の「心せく杉の庵の名残かな行へは今朝の霧にまかせて」（寂蓮法師集・山路霧・一四一）が早いか。右記の越前の一首や、俊成の「またたぐひあらしの山の麓寺杉の庵に有明の月」（撰歌合建仁元年八月十五日・古寺残月・五一）が続く（「すぎのいほ」の形も少なく、月卿雲客妬歌合建保三年六月・二八・藤原資隆が早い）。慈円（拾玉拾解題・十題百首・一〇六）や家隆（玉吟集・（九条前内大臣基家家百首）・一二三二）にも作例がある。勅撰集には、『玉葉集』に右記の俊成詠（七一八）と有家の一首（八五六）、『風雅集』に頼政の一首（一七七九）が見えるのみであり（「すぎのいほ」の形も風雅集・一六〇八・光厳院のみ）、京極派勅撰集占有の歌詞である。新古今歌人が詠出し、関東歌人が詠み継ぎ、京極派勅撰集に掬われた歌詞とも言える。

北条義時の孫で重時の男、つまり泰時の甥長時の「なもあみだ仏と今は契りても憂き世の夢をおどろかすらむ」（新和歌集・哀傷・一首によみておくりける・四六一）は、この歌からの影響を見てよいであろう。

後出の類詠「静かなる園に降り来る村時雨憂き世の夢も覚め果てよとや」（尊円親王詠法華経百首・冬・安楽行品菩・薩有時入於静室・五一）は、経文題歌であり、泰時の歌との関係を見る必要はないのかもしれないが、「憂き世の夢」を覚醒させる「村時雨」の一致は気になるところである。

31　雪降れば枯野の草も埋もれて今日や雉子の根や求むらん（東撰六帖抜粋本・第四・冬・枯野・三八八）

訳　雪が降ると枯野の草も埋もれて、今日は雉子が（雪の下の）根を探し求めているのだろうか。

「枯野」の「雪」、「枯野」の「雉子」は、『正治初度百首』に「狩り暮らし枯野の草の雪折れをやがて枕に結ぶ寒けさ」（冬・一二七一・隆信）、「雉子住む枯野隠れのかひもなく草とる鷹の音聞こゆなり」（冬・一七七〇・師光）とあるのが目立った先行例である。また、「降」る「雪」に「埋もれ」る「野」は、『新古今集』の「み狩り野はかつ降る雪に埋もれて鳥立も見えず草隠れつつ」（冬・六八七・匡房）が目に付く。さらに、「根を求む」も、同集の「沼ごとに袖ぞ濡れぬる菖蒲草心に似たる根を求むとて」（恋一・一〇四二・小大君）が有力な先行例である。つまり、泰時詠の用詞や景趣は、新古今歌人詠や『新古今集』歌に支えられているように見えるのである。

そうだとしても、草も雪に埋もれた枯野で、雉子が根を求めることを思いやる一首の想念は珍しく、先例を見ない。雉子の巣作りは、草原や雑木林の地面に浅く掘られた窪みに、枯れ草などを僅かに敷くという。ほぼ一年を通して同じ場所に棲み、冬場の雪には雪面をほじって餌を求めるらしい。泰時は、和歌の伝統に拠るのではなく、雉子の実際の生態に即して詠じたのではないだろうか。

とすれば、実際に雉子狩りをしたか見聞したと想像させる境涯の人物が、「新古今」に意識を向けていたことを推

測させる歌を詠じた、関東武士泰時をよく表す一首と評することができるのである。

32　高瀬（たかせ）さす氷の音にさ夜（よ）更けて綱手にちがふ鶍（あぢ）の村鳥（東撰六帖抜粋本・第四・冬・水鳥・四二〇）

訳　高瀬に棹さす氷の音に夜が更けて、高瀬舟の綱手縄に飛び違う鶍の群鳥よ。

「高瀬」は、川の流れが急で底浅く波が高く立つ場所を言う。「さす」は、舟で行くのに棹さすこと。「高瀬」を運航するために底を扁平にして吃水を浅く作った舟が「高瀬舟」。「綱手」は、舟を曳く引き縄綱のこと。「鶍」は、小形の鴨である巴鴨の異名という。

「高瀬舟棹の音にぞ知られける蘆間の氷ひとへしにけり」（金葉集・冬・氷をよめる・二七一・隆経）を本歌にすると見る。『後拾遺集』初出の隆経の歌を本歌と見ることについては、9に記した。

下句は、寂蓮詠と伝える「程もなく立ちぬる跡に帰るなり筏にちがふ鶍の群鳥」（夫木抄・雑十五・筏・百首歌、水鳥馴筏・一五七六一）に倣ったように見える。また、登蓮作という「難波江に下す高瀬の越す棹にいくたび立ちぬ鴨の群鳥」（夫木抄・雑十五・船・仁安二年二月歌林苑歌合・一五七七九）にも、一首全体の用詞・景趣が通う。この両首との関係性は措いて、隆経の歌に「綱手にちがふ鶍の村鳥」を付加しているのであり、言わば院政期本歌取りの詠み益しの手法であると言うことができる。

⑬拾遺風体集　冷泉為相撰。正安四年（一三〇二）七月二十一日以後、嘉元元年（一三〇三）十二月『新後撰集』奏覧以前。位署「平泰時朝臣」。一首。島原図書館蔵松平文庫本（一三〇・七）

33　春たけて紀(き)の河白(しろ)く流(なか)るめり吉野(よしの)の奥(おく)は花や散るらむ（拾遺風体集・川落花・三六。夫木抄・春四・花・河落花、明玉・一一七五。歌枕名寄・巻三十三・南海部・紀伊国・雑篇・木河・作者不記〔前歌「俊頼」〕・八六〇二）

訳　春が闌けて、紀の川が白く流れているように見える。（上流にある）吉野の奥は、花が散っているのだろうか。

「吉野川花の白波流るめり吹きにけらしな山おろしの風」（教長集・散る花をよめる・一三五。玄玉集・草樹歌上・題不知・五〇〇）に景趣が似通うが、この歌を泰時が知り得たかは分からない。下句は、「いづくにて風をも世をも恨みまし吉野の奥も花は散るなり」（千載集・雑中・一〇七三・定家）に倣っていようか。

「紀の河」は、紀伊国の歌枕で、現和歌山県の紀の川のこと。大和国の歌枕「吉野」を流れる「吉野川」の下流である。

　下流の様子から上流の「奥」を推測する詠み方は、『古今集』の「この河に紅葉葉流る奥山の雪げの水ぞ今増さるらし」（冬・三二〇・読人不知）を初めとして少なくなく、落花についても「水上に花や散るらむ山川のゐ杭にいとどかかる白波」（金葉集・春・水上落花をよめる・六二・経信）などと詠まれている。しかし、「吉野（川）」とその下流である「紀の川」の流れを「花・桜」で結び付ける趣向は、泰時の創出かどうかは分からないが新味があることは間違いない。後代では、実隆の「水上は芳野と聞けば紀の川の波の花まで飽かぬ色かな」（雪玉集・巻十五・紀伊の川をわたると・て六四四四）や契沖の「滝に散る吉野の桜流れては紀の川ゆする花の白浪」（漫吟集・春下・五一）がある。これらとの関係性は不明だが、泰時の歌が詠み方を先取りしていることは確かである。また、「春たけて」「紀の川白く」の初句も伝統的ではなく、この歌の独自性は揺るがない。それにしても、何故泰時は吉野川の下流である「紀の川」に着目したのだろうか。承久三年（一二二一）閏十月十二日付けで北条義時から紀伊国諸荘地頭を安

堵された（鎌倉遺文二八七三関東下知状案）有力武士湯浅宗光などを通じて、同国の地勢を知ることがあったのかもしれないと想像するのである。

この一首は、『夫木抄』の集付から、藤原知家撰の散佚打聞「明玉集」に採られていたことが分かる。

⑭夫木抄　藤原（勝間田）長清撰か。延慶二年（一三〇九）～同三（一三一〇）頃か。位署は「平泰時朝臣」。三首。一一七五は33に既出。静嘉堂文庫本。

34　年経たる鶴の岡辺の柳原青みにけりな春のしるしに（夫木抄・春三・柳・春歌中、柳・八六八。歌枕名寄・東海四・相模・雑篇・鶴岡・五三五五、二・三句「鶴が岡辺の松の葉の」。六華集・春・五八、二句同上。六花集注・一七、二句同上）

訳　年を取った鶴のように年を経た鶴岡八幡宮の辺りの柳原が、青くなったのであったな。春が来たしるしとして。

「年経たる松だになくは浅茅原なにか昔のしるしならまし」（後拾遺集・雑四・同じ所〔河原院〕にて松をよみ侍りける・一〇四四・江侍従）を本歌にすると見る。『後拾遺集』初出の江侍従の歌を本歌と見ることについては、9に記した。

「年経たる鶴の岡辺の」は、「年経たる鶴」から「鶴」を重ねて「鶴の岡辺の」へ鎖る。「鶴の岡辺」は、もちろん鎌倉の鶴岡八幡の辺りということ。歌に「鶴の岡」を詠むことは、実朝の「鶴の岡あふぎて見れは峰の松梢はるかに雪ぞ積もれる」（金槐集定家所伝本・冬・鶴岡別当僧都許に、雪の降れりしあした、よみてつかはす歌・三一三）が

早いが、泰時のこの歌との先後は必ずしも明確ではない。

「柳原青みにけりな」は、新鮮な表現である。『新古今集』の「高瀬さす六田の淀の柳原緑も深く霞む春かな」（新古今集・春上・七二・公経）の「柳原緑も深く」に負っているか。そうだとすると、『新古今集』歌に依拠しながら、独自に変化させた表現ということになる。四句切れの「青みにけりな」は、例を見ない新奇な句である。

「春のしるしに」の句は、「梓弓春のしるしにいつしかとまづたなびくは霞なりけり」（堀河百首・春・霞・四五・隆源）や「いつしかと春のしるしに立つものはあしたの原の霞なりけり」（金葉集・春・早春の心をよめる・六・長実）等に学んだのであろう。後者を踏まえてか、家隆は「杉よりも春のしるしは門毎に柳ぞ立てる訪ふ人もがな」（玉吟集・百首和歌〔家百首〕・春・門柳・一〇〇二）という歌を詠んでいる。これを泰時が知り得たかは分からない。

なお、近世後期の橘曙覧に「そことなく青む六田の柳原目に立つばかり春もなりにき」（志濃夫廼舎歌集・松籟艸第一集・柳弁春・二四五）という、『新古今集』の公経詠を本歌にした、泰時詠と類想の歌がある。

35　冬枯（かか）れの高嶺（たかね）に残（のこ）る松なくは空行く・風をいかで知（し）らまし（夫木抄・冬一・冬風・題不知、雲葉・六六三七）

訳　冬枯れした高嶺に残っている松が無くては、空を吹き行く風を、どのようにして知ろうかしら。

一首の仕立ては、髄脳に引かれる古歌「鶯の谷より出づる声なくは春来ることをいかで知らまし」（俊頼髄脳・一七九・作者不記。綺語抄・五七〇。袋草紙・六〇四・忠峰千里歟如何。八雲御抄・六二一・忠峰）に同様である。

「冬枯れの」は、『古今集』の「冬がれの野辺と我が身を思ひせばもえても春を待たましものを」（恋五・七九一・

伊勢）を原拠とする。続く「高嶺に残る」は先行例を見ない句で、「松なくは」も他例を見ない句である。

「空行く風」は、新古今時代の「忘れじと空行く風に答ふなり程は雲ゐの峰の松原」（春日社歌合元久元年・松風・六九・通光）や「山里に月は見るやと人は来ず空行く風ぞこの葉をも訪ふ」（新古今集・雑上・一五二〇・慈円。仙洞句題五十首・山家月・一四六）が早い例となる。泰時は後者をもちろん知っていたであろうが、特に前者を見習っていたのかもしれない。

古歌や新古今歌人の歌に拠りつつも、独自の表現も追い求めた歌のように見える。

『夫木抄』の集付から『雲葉集』の散佚部分に存した歌と知られる。

⑮歌枕名寄（澄月撰。延元元年（一三三六）までに成立か）。位置「平泰時」。五首。四九五三は8、五三五五は34、八三三〇は6、八六〇二は33に既出。万治二年（一六五九）刊本を底本とした新編国歌大観本。

36　雪晴れて大島白き朝凪に笹の葉浮かぶ沖の釣舟（歌枕名寄・巻二十・東海四・伊豆・大島幡磨周防有同名・五三〇一）

訳　雪が晴れて大島が白く見える朝凪に、笹の葉が浮かぶような沖の釣舟よ。

「雪晴れて」は、「雪晴」「雪霽」（新撰万葉集、和漢朗詠集等）の訓読語ではある。「雪晴る」の類は和歌では伝統的な詞ではなく、「雪晴れぬ千歳の谷の遅桜幾たび春をよそに聞くらん」（為忠家後度百首・春・澗底桜・一九・俊成）辺りが早く、「雪晴れて都の月を眺むれば四方の藁屋も玉のうは葺き」（露色随詠集・月百首・四四）が続く。泰時詠より後出では、伏見院に「朝日差す森の梢は雪晴れて滴落ち添ふ木木の下道」（伏見院御集〔新編ＣＤ－ＲＯＭ

版〕・冬森・二二九六）がある。泰時が『為忠家後度百首』の俊成詠に学んだ可能性はあろうか。ちなみに、泰時の19「時鳥人づてにのみ聞く頃は身の数ならぬ音こそなかるれ」（新千載集・夏・人伝郭公といふことをよめる・二二七）の歌題「人伝郭公」は、『為忠家後度百首』で設けられた題で、勅撰集にはこの泰時の歌が見えるのみである。泰時が、『為忠家後度百首』を披見していた可能性が浮かび上がるのである。

「大島白き」は、例を見ない新奇な表現である。「白き」景の歌は、新古今時代前後に多く詠まれている。挙例すれば、次のとおりである。「眺めけんくものふるまひ空晴れて月影白き玉津島姫」（千五百番歌合・雑一・二八三二・季能）、「雨晴るる田簑の島に月冴えて重ねて白き鶴の毛衣」（玉吟集・秋・秋歌よみける中に・島月・二〇二七）、「鵲の渡すやいづこ夕霜の雲ゐに白き峰の梯」（冬題歌合建保五年・冬山霜・二一・家隆。新勅撰集・冬・三七五。玉吟集・二二五一。家隆卿百番自歌合・九〇）、「鳰の海や波間に白き沖つ島さすがに雪の色ぞまぎれぬ」（道助法親王家五十首・冬・八〇八・隆昭）。直接の影響関係があるかは分からないが、こういう「白き」景趣を詠む、新古今前後に始まる比較的新しい傾向に泰時詠が沿っていることは間違いないであろう。泰時が詠んだ「大島」は、『歌枕名寄』の部類どおり、伊豆国のそれで矛盾はないであろうが、この所名を詠むことは伝統的ではなく、関東武士の選択と言えば言えるであろう。

「釣舟」の歌としては、「朝凪の潮路遥かに出でにけり?に紛ふ沖の釣舟」（広田社歌合承安二年・海上眺望・六六・師光。師光集・九六、初句「朝凪に」）や「わたの原八十島白く降る雪のあまぎる浪に紛ふ釣舟」（冬題歌合建保五年・冬海雪・六六・家隆。新勅撰集・冬・四二六。玉吟集・二二五五。家隆卿百番自歌合・九八）の用詞や景趣に通う。特に家隆詠は泰時の視野に入っていたであろうし、これを踏まえていても不思議はないが、とすると泰時の歌は、泰時三十五歳の時、『冬題歌合』催行の建保五年（一二一七）十一月四日以降の作ということになるが、泰時の詠作時期

が不明なので、断定はできない。

「沖」に「浮かぶ」「釣舟」を「笹の葉」に見立てることは、近現代短歌ならばありがちな比喩のようにも思われるが、少なくとも中世までの和歌ではあたりまえには見ない詠み方であろう。それでも、それは全き独創ではなく、「吹き払ふ磯辺の山の木枯らしに一葉残れる海人の釣舟」（浄照房集〔定家男光家〕・十一月の頃、黒崎の宮に参りて、嵐激しき山のけしき心細く見え渡りて、沖に釣舟のかすかに見え侍りしに・三四）や「鳰の海やまだうつろはぬさざ浪に一葉浮かべる秋の釣舟」（日吉社十禅師歌合承久元年・湖上眺望・二四・通光）や「海原や波間に見ゆる笹竹の一葉ばかりの海人の釣舟」（洞院摂政家百首・雑・眺望・一六八五・道家）のような類似の例が存しているのである。これらと泰時詠の先後は正確には不明である。仮に泰時詠がこれら、特に道家の歌に拠っているのだとすれば、泰時の詠出時期は当然、『洞院摂政家百首』成立の貞永元年（一二三二）十月頃以降となり、同時に泰時の学習範囲の広さを窺うことになる。泰時五十歳の時以降の詠作ということになるが、これも泰時詠の時期が不明なので、分からない。

新古今前後の、新しい詠み方の歌に通うところのある詠作である。その中には、泰時が見習ったと見られる歌もあるが、それに留まらず、泰時が近代短歌に通じるような景趣を伝統的ではない詞遣いで表現し得ていることは見落とせないのである。

⑯沙石集　無住作。弘安六年（一二八三）八月成立し以降に加除訂正あり。異本歌一首。日本古典文学大系本。

37　いにしへの浦島がこの箱かとてあけずはいかにくやしからまし（沙石集異本歌・一二二一・泰時）

訳　昔の浦島が子の（開けたら悔しい）箱かといって、（金千両が入った）この箱を開けなかったら、どんなに悔しかったであろうに。

日本古典文学大系『沙石集』「拾遺」の〔一一〕（本文巻第三の（二）「問注ニ我ト劣ケタル人事」の段の裏書）の（一〇「美言有感段」）に次のように見える（底本は内閣本。原文の表記は私に改める）。

泰時の事どもの段　はた板等の段

泰時の事、世間に沙汰せしむ。承久の時大将軍にて坐すを、武勇の道ゆゆしかりけるが、和歌の道また生ひかりてその骨を得て、選集に多くその歌入れりと云へり。

奥州に或る尼公、訴訟せる事有りて、悦びのよしに杉箱のをかしげなるが、いと目も堪へぬを、一つ進めたりける。なに物ぞと開き見るに、金を千両入れたりければ、こはいかにとて、

いにしへの浦島がこの箱かとてあけずはいかにくやしからまし

本歌の取り様優なるをば、彼は、明けてくやしかりしを、開けずはと云へる、めだたし。（後略）。

ここに言う「本歌」は、「夏の夜は浦島の子が箱なれやはかなく明けて悔しかるらむ」（拾遺集・夏・一二二・中務。新撰朗詠集・夏・夏夜・一四四）を指すのであろう。これはもちろん、浦島伝説を言う「浦島の子が箱なれや」の序から、「開けて」の掛詞で「明けて」を起こす。泰時の歌とする一首は、その掛詞は捨てているが、『沙石集』異本は、「悔しかるらむ（悔しかりしを）」を反実仮想に転じたことを評価して、歌として「優」だとは思われないこの歌の「本歌の取り様」を「優」だと言いなすのであろう。

下句は、「ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑあけてはいかに悔しからまし」（新勅撰集・恋五・一〇二〇・紫式部。紫式部集・七五）に倣っているようにも見える。

「金千両」に執着するかのようなこの歌は、道理の人泰時の人物像にはそぐわない感じがある。しかし、「問注」（訴訟）を裁断して後に感謝された泰時が金を受け取ることも（現代の感覚では賄賂のように感じるが）、あるいはあり得たのかもしれない。また、根拠はともかくとして、「和歌の道また生ひかかりてその骨を得て」（和歌の道もまた成長するにつれて、その勘どころを会得して。原文「和歌ノ道又生カヽリテ其骨ヲ得テ」）とあるように、歌にも優れていたという評価は、歌人泰時の在りように矛盾はしない。それでもなお、この歌が真に泰時の作であるかは、疑問に思わざるを得ない。

北条泰時詠各集歌番号（重出状況）一覧・底本一覧

＊各集名の算用数字は、入集歌数。（　）内に重出を示す。その集名は、頭の二〜四字程度に略す。各末尾に底本を記す。

新勅撰集３　五六九、一一五二（古今著聞・七）、一二六〇。穂久邇文庫蔵定家識語本（影印版による）

続後撰集３　一〇五九（題林・三一七六）、一〇七四、一一五〇（歌枕・八三三〇）。冷泉家時雨亭文庫蔵為家自筆本（影印版による）

続古今集５　六五二（雲葉・八六四、〔宗尊親王百五十番歌合百九番判詞〕（以下省略）、六華・一二六一）、八六五（雲葉・九七二、歌枕・四九五三、六華・一五四九）、一六一二（題林・五二九二）、一六四五、一八四〇（明恵・一二七）。尊経閣文庫蔵本（伝二条為氏筆）

続拾遺集３　八一、五三九、一一七六。尊経閣文庫蔵本（伝飛鳥井雅康筆）
新後撰集１　一三七〇。書陵部蔵二十一代集本（五一〇・一三。兼右本）
玉葉集１　一八九七（万代・二八一）。同右。
続千載集１　四九〇（雲葉・五六七）。同右。
続後拾遺集１　六八五。同右。
新千載集２　二二七（題林・一九四〇）、一八二九。同右。
新拾遺集１　一七三八。同右。
明恵上人集１　一二七（続古今・一八四〇）。新編私家集大成ＣＤ－ＲＯＭ版。
万代集１　二八一（玉葉・一八九七）。阪本龍門文庫蔵本（初撰本。龍門文庫善本叢刊影印版による）。
雲葉集３　五六七（続千載・四九〇）、八六四（続古今・六五二、六華・一二六一）、九七二（続古今・八六五、歌枕・四九五三、六華・一五四九）。内閣文庫本（特九・一一）。新編国歌大観本は巻一～十は同本を底本にし巻十五は彰考館本（巳・四）を底本とする）。
東撰六帖４　三（同抜粋本・三）、一三二一、一三九、二四九。島原図書館松平文庫本（一二九・一九）
同抜粋本８　三（東撰・三）、七九、一〇八、一四六、一七八、三七〇、三八八。四二〇。祐徳稲荷神社寄託　中川文庫本（国文学研究資料館データベースの画像データに拠る）、福田秀一「祐徳稲荷神社寄託／中川文庫本「東撰和歌六帖」（解説と翻刻）」（『国文学研究資料館紀要』二、昭五一・三）の翻印参照。
拾遺風体集１　三六（夫木・一一七五、歌枕・八六〇二〔作者不記、前歌「俊頼」〕）。島原図書館蔵松平文庫本（一三〇・七）

夫木抄3　八六六八（歌枕・五三五五、六華・五八、六花集注・一七）、一一七五（拾遺風体・三六、歌枕・八六〇二（作者不記、前歌「俊頼」））、六六三七。静嘉堂文庫本。

歌枕名寄5　四九五三（続古今・八六五、雲葉・九七二、六華・一五四九）、五三〇一、五三五五（夫木・八六六八、六華・五八、六花集注・一七）、八三三〇（続後撰・一一五〇）、八六〇二（作者不記、前歌「俊頼」）（拾遺風体・三六、夫木・一一七五）。万治二年（一六五九）刊本を底本とした新編国歌大観本。

六華集3　五八（夫木・八六六八、歌枕・五三五五、六花集注・一七）、一二六一（続古今・六五二、雲葉・八六四）、一五四九（続古今・八六五、雲葉・九七二、歌枕・四九五三）。島原図書館蔵松平文庫蔵本（一三二・八）。

題林愚抄3　一九四〇（新千載・二二一七）、三一七六（続後撰・一〇五九）、五二九二（続古今・一六一二）。寛永十四年（一六三七）刊本を底本とした新編国歌大観本。

六花集注1　一七（夫木・八六六八、歌枕・五三五五、六華・五八）。古典文庫本。

古今著聞集1　七（新勅撰・一一五二）。日本古典文学大系本。

沙石集集1（異本）　一二二一。日本古典文学大系本。内閣文庫本（特一二〇・八）による拾遺（新編国歌大観の異本歌拾遺（異本歌））。